

—茨城県土浦市—

浅間台一字一石経塚・宮西 A 遺跡・北西原遺跡(第 8 次)

—平成 27・29 年度市内遺跡発掘調査報告書—

浅間台一字一石経塚・宮西 A 遺跡・北西原遺跡(第 8 次)

—平成 27・29 年度市内遺跡発掘調査報告書—

二〇二〇

土浦市教育委員会

2020

土浦市教育委員会

—茨城県土浦市—

浅間台一字一石経塚・宮西 A 遺跡・北西原遺跡(第 8 次)

—平成 27・29 年度市内遺跡発掘調査報告書—

2020

土浦市教育委員会

序

土浦市は、霞ヶ浦や桜川といった水源に恵まれ、古くから人々の暮らしが営まれてきました。そのため、市内には貝塚や古墳など数多くの遺跡が立地しています。これらの遺跡は、昔の生活や文化を現代の私たちに伝えてくれる貴重な遺産といえます。このような貴重な文化財を保護し後世に伝えることは、私たちの重要な任務であり、郷土の発展のためにも大切なことです。

本書は、平成 27 年、29 年度に行われた、3 つの発掘調査の報告書です。浅間台一字一石経塚は急傾斜地対策工事に、宮西 A 遺跡は市道改良工事に、そして北西原遺跡は都市計画道路建設工事に伴うものです。本書が、土浦市の歴史・文化の究明に役立つことができれば幸いです。

最後になりましたが、調査から報告書刊行にあたり、関係者の皆様のご協力とご支援に対し心から厚く御礼を申し上げます。




令和 2 年 3 月

土浦市教育委員会
教育長 井坂 隆

例言

1. 本書は、土浦市教育委員会が実施した、急傾斜地対策工事による遺跡不時発見に伴う浅間台一字一石経塚（土浦市木田余字浅間台2548所在）、市道沖宿124号線拡幅工事に伴う宮西A遺跡（土浦市沖宿町字宮西2329外所在）、都市計画道路常名虫掛線改良工事に伴う北西原遺跡（土浦市常名2821番外所在）の発掘調査報告書である。
2. 浅間台一字一石経塚の発掘調査は土浦市教育委員会が実施した。調査期間は平成27年6月2日から6日である。宮西A遺跡の発掘調査は、土浦市建設部道路課の依頼を受けて、市教育委員会が実施した。調査期間は平成28年1月25日から2月3日である。北西原遺跡の発掘調査は、土浦市建設部公園街路課の委託を受け、有限会社日考研茨城（代表取締役小川和博）が発掘調査支援を行い、土浦市教育委員会が行った。調査期間は平成30年1月10日から3月20日である。
3. 浅間台一字一石経塚の発掘調査は主任調査員を比毛君男（上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員）が務め、亀井翼・一木絵理（同）・宮窪ひろみ（同社会教育指導員）・鈴木隆浩・久賀谷勇磨（土浦市教育委員会文化課職員）が補佐した。宮西A遺跡の発掘調査は主任調査員を亀井翼が務め、比毛君男・宮窪ひろみが補佐した。北西原遺跡の発掘調査は、主任調査員を亀井翼が務め、一木絵理・島崎達也（上高津貝塚ふるさと歴史の広場社会教育指導員）が補佐した。
4. 浅間台一字一石経塚の整理作業は、平成28年4月から平成30年1月まで実施した。宮西A遺跡、北西原遺跡の整理作業は、平成30年度に実施した。
5. 本遺跡調査に関係する資料は、すべて上高津貝塚ふるさと歴史の広場にて保管している。なお遺物の記録や整理、保管に際して、宮西A遺跡は「OMA1」、北西原遺跡は「UK8」の略称を使用している。
6. 浅間台一字一石経塚から出土した陶磁器に関しては愛知学院大学藤澤良祐氏にご教示を賜った。
7. 発掘調査から報告書刊行に至るまで、次の方々および諸機関からご助言・ご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。（敬称略 五十音順）。
茨城県教育庁総務企画部文化課、尾室友萌、柏 昌美、加藤舜也、加藤千里、窪田恵一、小林圭子、後藤美紅、齊木 誠、高梨智恵子、田邊えり、土浦市建設部公園街路課、土浦市建設部道路課、中村佐太男、福田明彦
8. 本書の執筆分担は以下のとおりである。編集は亀井が行った。
第1章：第1節を比毛が、第2節以降を亀井が執筆した。
第2章：亀井
第3章：第2節2（1）（2）を荒井美香（立正大学学生）が、（3）を小屋亮太、（上高津貝塚ふるさと歴史の広場 社会教育指導員）が、それ以外の部分を比毛が執筆した。なお、多字一石の解説については西口正隆（土浦市立博物館学芸員）の協力を得た。
第4章、第5章：亀井
第6章：株式会社パレオ・ラボの報告書をもとに、亀井が執筆した。
第7章：第1節を比毛が、第2節以降を亀井が執筆した。

凡例

1. 遺構の略称に使用した記号は以下の通りである。
堅穴建物：S I 土坑：S K 地下式坑・不明遺構：S X 攪乱：K ビット・柱穴・貯蔵穴：P
2. 遺構・遺物の実測図中の表記は以下の通りである。
炉・焼土範囲  炭化物範囲・炭化材  硬化面：一点鎖線
黒色処理 
3. 遺構・遺物の記述は以下を原則とした。
 - (1) 水糸レベルは海拔高度 (m) を示す。
 - (2) 遺物番号は本文・挿図・写真図版とも一致する。
 - (3) 遺構全体図は任意の縮尺で、各遺構の実測図は1/60、遺物実測図は1/2、1/3、1/4の縮尺で掲載してスケールで表示した。
 - (4) 遺構の「主軸」は原則カマドあるいは炉を通る軸線とし、主軸方向は座標北からみてどの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。
 - (5) 遺物の観察表の法量は、A：口径、B：底径、C：器高、() が現存値、[] が復元値を表す。胎土の表記は肉眼観察の結果確認できた鉱物を記した。
 - (6) 地層や遺物の色調は、『新版標準土色帖』（小川正忠・竹原秀雄編著 2002 日本色研事業株式会社）を使用した。
 - (7) 地層の記載については『発掘調査のてびき—集落遺跡発掘編—』および『同一整理・報告書編—』（文化庁文化財部記念物課2010）に従った。

目次

序

例言

凡例

目次 挿図目次 表目次 写真図版目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第2章 環境	3
第3章 浅間台一字一石経塚	13
第4章 宮西A遺跡	21
第5章 北西原遺跡（第8次）	34
第6章 自然科学分析	63
第7章 総括	65
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図	土浦市周辺の地形	3	第24図	第125号竪穴建物出土遺物	38
第2図	木田余地区の遺跡分布図	4	第25図	第126号竪穴建物	39
第3図	神宿地区の遺跡分布図	6	第26図	第126号竪穴建物出土遺物	40
第4図	常名・坂田地区の遺跡分布図	9	第27図	第127号竪穴建物	41
第5図	浅間台一字一石経塚 測量図	14	第28図	第127号竪穴建物遺物出土状況	42
第6図	浅間台一字一石経塚出土経石 (1)	17	第29図	第127号竪穴建物出土遺物	42
第7図	浅間台一字一石経塚出土経石 (2)	18	第30図	第128号竪穴建物	44
第8図	浅間台一字一石経塚出土遺物	19	第31図	第128号竪穴建物出土遺物	44
第9図	調査区的位置	21	第32図	第129、130号竪穴建物	45
第10図	調査区全体図	22	第33図	第129号竪穴建物遺物出土状況	46
第11図	第1号竪穴建物	23	第34図	第129号竪穴建物出土遺物 (1)	47
第12図	第1号竪穴建物出土遺物	24	第35図	第129号竪穴建物出土遺物 (1)	48
第13図	第2、3号竪穴建物	25	第36図	第129号竪穴建物出土遺物 (3)	49
第14図	第2号竪穴建物出土遺物	25	第37図	第131、46号竪穴建物、 第1号不明遺構	54
第15図	第3号竪穴建物出土遺物	25	第38図	第131号竪穴建物出土遺物	55
第16図	第4、5号竪穴建物出土遺物	26	第39図	第46号竪穴建物出土遺物	55
第17図	第4号竪穴建物出土遺物	27	第40図	第1号不明遺構出土遺物	56
第18図	第5号竪穴建物出土遺物	29	第41図	第65号土坑	57
第19図	第1号土坑	30	第42図	第66号土坑	57
第20図	第2～8号土坑	31	第43図	第16、17号溝	58
第21図	常名台遺跡群の調査区配置図	35	第44図	第16号溝出土遺物	59
第22図	北西原遺跡 (第8次) 調査区全体図	36	第45図	第18～21号溝、ピット群	60
第23図	第125号竪穴建物	37	第46図	第18～21号溝セクション	61

表目次

第1表	木田余地区周辺遺跡一覧表	5	第7表	第1号竪穴建物出土遺物観察表	23
第2表	神宿地区周辺遺跡一覧表	7	第8表	第2号竪穴建物出土遺物観察表	25
第3表	常名・坂田地区周辺遺跡一覧表	10	第9表	第3号竪穴建物出土遺物観察表	25
第4表	浅間台一字一石経塚において 出現頻度の高い文字	15	第10表	第4号竪穴建物出土遺物観察表	28
第5表	浅間台一字一石経塚 出土遺物観察表 (1)	20	第11表	第5号竪穴建物出土遺物観察表	30
第6表	浅間台一字一石経塚 出土遺物観察表 (2)	20	第12表	第125号竪穴建物出土遺物観察表	38
			第13表	第126号竪穴建物出土遺物観察表	40
			第14表	第127号竪穴建物出土遺物観察表	43
			第15表	第128号竪穴建物出土遺物観察表	44

第16表	第129号竪穴建物出土遺物観察表 (1)	49	第21表	第46号竪穴建物出土遺物観察表	56
第17表	第129号竪穴建物出土遺物観察表 (2)	50	第22表	第1号不明遺構出土遺物観察表	56
第18表	第129号竪穴建物出土遺物観察表 (3)	51	第23表	第16号溝出土遺物観察表	59
第19表	第129号竪穴建物出土遺物観察表 (4)	52	第24表	樹種同定結果	64
第20表	第131号竪穴建物出土遺物観察表	55	第25表	炭化モモ核保存処理資料	64

写真図版目次

PL 1	経塚発見時の状況、経石出土状況、経石出土状況 (拡大)
PL 2	経石埋納土坑完掘状況 (東から)、経石埋納土坑完掘状況 (上から)、経塚完掘状況
PL 3	蓮華座をもつ佛字磔 (1)
PL 4	蓮華座をもつ佛字磔 (2)
PL 5	多字一石 A種 (1)、多字一石 A種 (2)
PL 6	多字一石 B種 (1)、多字一石 B種 (2)、経石以外の出土遺物
PL 7	宮西A遺跡 1区全景、宮西A遺跡 2区全景
PL 8	第1号竪穴建物、第1号竪穴建物遺物 (1) 出土状況、第2号竪穴建物
PL 9	第3号竪穴建物、第4号竪穴建物、第4号竪穴建物カマドセクション
PL 10	第5号竪穴建物、第1号柱穴、第2~9号柱穴
PL 11	第1号竪穴建物出土遺物、第2号竪穴建物出土遺物、第3号竪穴建物出土遺物、 第5号竪穴建物出土遺物
PL 12	第4号竪穴建物出土遺物
PL 13	北西原遺跡 (第8次) 全景、第125号竪穴建物
PL 14	第126号竪穴建物、第126号竪穴建物遺物 (1) 出土状況、127号竪穴建物
PL 15	第127号竪穴建物炭化材出土状況、第127号竪穴建物南北ベルトセクション (西から) 第128号竪穴建物
PL 16	第129、130号竪穴建物、第129、130号竪穴建物セクション、 第129号竪穴建物遺物 (22、23) 出土状況
PL 17	第129号竪穴建物遺物 (27) 出土状況、第131号竪穴建物、第46号竪穴建物
PL 18	第46号竪穴建物セクション、第1号不明遺構、第65号土坑
PL 19	第66号土坑、第16号溝、第17号溝
PL 20	第18、19号溝、第20号溝
PL 21	第21号溝、ピット群 (P1)
PL 22	第125号竪穴建物出土遺物、第126号竪穴建物出土遺物、第127号竪穴建物出土遺物、第128号 竪穴建物出土遺物
PL 23	第129号竪穴建物出土遺物 (1)
PL 24	第129号竪穴建物出土遺物 (2)
PL 25	第129号竪穴建物出土遺物 (3)、第131号竪穴建物出土遺物、第46号竪穴建物出土遺物、 第1号不明遺構出土遺物、第16号溝出土遺物、出土炭化モモ核
PL 26	北西原遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 浅間台一字一石経塚

平成27年、土浦市木田余字浅間台2548の土地所有者から、自宅裏山から経石が多数出土しているのを見てほしいとの依頼がある。同日、上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員が現地に行き、伐採後の急傾斜地の中腹に多数の経石が堆積した状態で露出しており、崖下に経石が多数落ちている状態を確認した。現地は茨城県の急傾斜地対策工事の一環で擁壁工事に伴う樹木の伐採と伐根直後の状態であった。

茨城県教育庁文化課（以下県教委）と、開発事業者である茨城県土浦土木工事事務所河川整備課と協議を行ったところ、新発見の遺跡として登録するとともに、工事に伴う発掘調査を市教育委員会が行うことで同意した。

文化財保護法第97条第1項に基づく遺跡発見の通知と、第94条に基づく遺跡発掘の通知は平成27年5月20日に市教育委員会から県教委に進達した。発掘調査は6月2日から行い、文化財保護法第99条に基づいて、6月4日土教委発632号にて発掘調査の報告を行った。現地調査は6日まで行い、経塚周辺の現況を平板測量と水準測量で記録した後、露出した経石を採取した。経石は転落分も残さず採取するよう可能な限り努めた。経石採取時の観察により、土坑を掘った内部に埋経したことが判明したため、完掘後の状況を再度測量した。6月11日、市教委が土教委発第638号にて発掘調査終了確認を県教委に依頼した。また同日、市教委は土教委発第639号で遺跡調査終了に伴う埋蔵物発見届を土浦警察署に提出した。県教委は文第1183号で発掘調査終了を確認し、文第1579号と第1580号で、埋蔵物の文化財認定と出土品の帰属について土地所有者及び市に通知した。

出土した経石の量は、土のう袋にして約200袋を数えた。平成28年4月から平成30年1月の2年度にわたり整理作業を行った。

第2節 宮西A遺跡

本調査は、土浦市建設部道路課が計画、実施する市道沖宿124号線拡幅工事に伴うものである。平成27年5月に市役所関係各課に埋蔵文化財取扱の照会を行ったところ、道路課より当事業計画について回答があった。事業予定地が周知の遺跡である宮西A遺跡（市遺跡番号203-385）に該当することから、道路課と教育委員会との間で協議を行い、試掘確認調査を実施することで合意した。平成27年10月30日、道路課より埋蔵文化財試掘確認調査依頼書が提出され、11月17日に試掘確認調査を実施した。その結果、平安時代の竪穴建物を中心とした埋蔵文化財が発見された。これを受けて道路課と協議した結果、市教育委員会が記録保存のための発掘調査を行うこととなった。

文化財保護法第94条に基づく通知は、平成27年12月28日に市教育委員会から県教委に進達し、平成28年1月19日付文第2577号にて、発掘調査を実施するように通知がなされた。

発掘調査は平成28年1月25日から開始され、文化財保護法99条に基づいて、1月27日付土教委発102号により県教委に発掘調査の報告を行った。調査は平成28年2月3日まで行い、2月9日付土教

委発第184号にて発掘調査終了確認を依頼した。県教委は2月16日付文第2890号にて調査終了を確認した。埋蔵物発見届は2月4日付で土浦警察署に提出し、4月26日付文第183号により、文化財と認定された。整理作業は平成30年度に実施した。

第3節 北西原遺跡（第8次）

本調査は、土浦市建設部公園街路課が計画、実施する都市計画道路常名虫掛線改良工事に伴うものである。

平成29年4月、市役所関係各課に埋蔵文化財取扱いの照会を行ったところ、公園街路課より当事業計画について回答があった。事業予定地が周知の遺跡である北西原遺跡（市遺跡番号203-238）に該当するため、公園街路課と教育委員会との間で協議を行った。その結果、試掘確認調査を実施し、埋蔵文化財が発見された場合には発掘調査を行うことで合意した。平成29年4月28日、試掘確認調査依頼が提出され、5月23日に試掘確認調査を実施したところ、古墳時代の竪穴建物を中心とした埋蔵文化財が発見された。

文化財保護法94条に基づく通知は、平成29年5月30日に市教育委員会から茨城県教育委員会に達し、6月9日付文第623号にて、県教委より発掘調査を実施するように通知がなされた。発掘調査は市教育委員会が実施することとなり、また、工務、労務管理等については、市公園街路課と発掘調査支援委託の契約を結んだ業者が行うこととなった。

発掘調査は平成30年1月10日に開始し、文化財保護法99条に基づいて、1月12日付土教委発第64号にて、県教委に発掘調査の報告を行った。調査は3月20日まで実施し、3月22日付土教委発第746号にて発掘調査終了確認を依頼した。県教委は3月30日付文第3423号にて調査終了を確認した。埋蔵物発見届は3月22日付で土浦警察署に提出し、4月10日付文第61号により、文化財と認定された。整理作業は平成30年度に実施した。

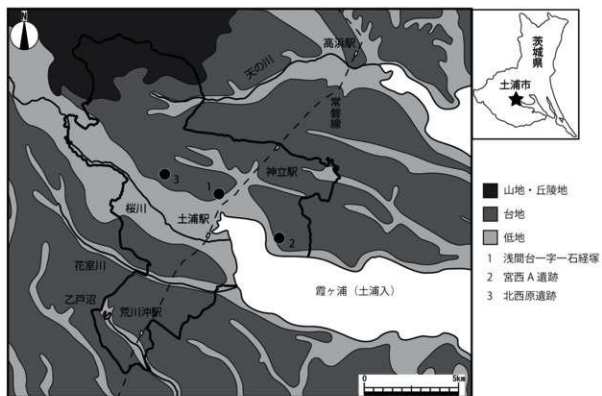
第2章 環境

第1節 地理的環境と層序 (第1図)

浅間台一字一石経塚は茨城県土浦市木田余に、宮西A遺跡は同市沖宿町に、北西原遺跡は同市常名にそれぞれ所在する。土浦市は茨城県南部に位置し、土浦入りで霞ヶ浦に接している。市域の地形は台地と低地に大きく分けられ、台地は市内中央を流れる桜川低地を境として、北に新治台地、南に筑波稲敷台地が分布している。本書で報告する遺跡はいずれも、桜川左岸、標高約20~30m程度の新治台地上に立地する。

遺跡の立地する新治台地および筑波稲敷台地は、下総層群を基盤とし、その上に武蔵野ローム層、立川ローム層に相当する新期関東ローム層が堆積している(宇野沢ほか1988)。下総層群は下位から地藏堂層、藪層、上岩橋層、木下層、常総層に区分されている。これらは、海と陸の環境を繰り返していたことを反映して、陸成の砂礫層と海成の砂や泥の繰り返しによって構成されている。そのうち最も新しい海成層である木下層は、主に浅海成の砂からなり、12~13万年前、関東平野が古東京湾と呼ばれる海域であったところに堆積した。海水準の低下に伴い淡水環境になると、氾濫原に常総層が堆積した。常総層では当時の堆積環境を反映して、河道には礫や砂が、後背湿地には泥が堆積している。

土浦市内の台地上において、遺構、遺物が発見される可能性があるのは新期関東ローム層以浅の地層である。新期関東ローム層は富士・箱根起源の降下火山灰が風化したものであり、約6万年前から



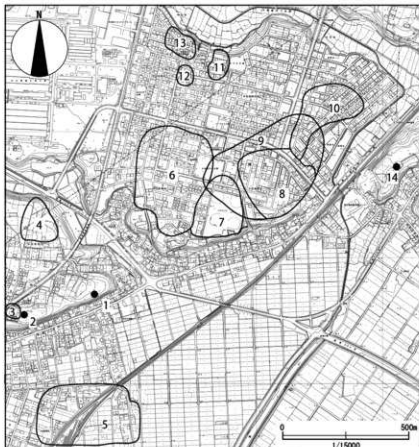
1万年前に、陸地化した台地に堆積したとされる(宇野沢ほか1988)。岩相は明褐色～褐明の砂混じりシルト層～粘土質シルト層であり、後述の黒土よりも細粒で粘性が高い印象を受ける。今回は検出されていないが、旧石器時代の遺物はこのローム層に含まれる。試掘確認調査、発掘調査では、このローム層上面までを重機で除去し、遺構確認面としている。ローム層から現在の地表までを覆うのが、暗褐色～黒褐色を呈する土壌(黒土)である。層厚は宮西A遺跡で70～80cm程度、北西原遺跡で40～50cm程度を測り、岩相は砂質泥～砂質シルト層である。これは風成塵などの堆積と土壌生成作用が同時に起こって形成された堆積土壌(三浦1995)と考えられる。多くの場合耕作地として利用されており、地表面近くは人力または機械によって攪乱されている。縄文時代から現在までの遺物を含み、縄文時代以降の遺構はこの黒土から掘りこまれている。遺構覆土は基本的に以上2つの堆積物からなり、ローム層、黒土、または両者の混合物が、自然(風や重力、降水に伴う崩落、堆積)または人為の営力によって遺構を埋積していると考えられる。

第2節 歴史的環境

本節では、報告遺跡が所在する木田余地区、田村・沖宿地区、常名・坂田地区について、それぞれ通時的な遺跡の消長を述べる。

1. 木田余地区(第2図、第1表)

浅間台一字一石経塚(1)が所在する木田余地区では、土地区画整理事業に伴って発掘調査が行



第2図 木田余地区の遺跡分布図(1:15000)

われた木田余遺跡群(一丁田台東遺跡、東台遺跡、御冥遺跡、宝積遺跡、椀買場遺跡)を中心として、旧石器時代から古代に及ぶ遺構、遺物が検出されている。

旧石器時代の遺物は御冥遺跡(7)、東台遺跡(8)、宝積遺跡(10)において出土している。とくに宝積遺跡(10)では石器集中地点が検出されており、硬質頁岩や那珂川産の黒色安山岩を用いた削器などが出土している。他の遺跡では、後世の遺構出土や表面採集による資料であるが、ナイフ形石器や石刃が出土している。

縄文時代草創期、早期については市内でも資料が少ない時期であるが、榎買場遺跡（6）において草創期の有茎尖頭器が出土している。前期では、一丁田台東遺跡（13）において前期中葉、後葉の土器片が出土しているが、遺構は検出されていない。中期には御冥遺跡（7）、東台遺跡（8）において、それぞれ土坑100基以上が検出されている。堅穴建物数は多くないものの、土坑の数と出土遺物の質、量から考えても拠点的な集落であったと考えられる。後晩期の遺物、遺構は少ないが、御冥遺跡（7）で堀之内式、加曾利B式の堅穴建物跡が検出されている。

弥生時代には東台遺跡（8）で11件、宝積遺跡（10）で29軒の堅穴建物跡が検出されており、市内では天の川左岸の原田遺跡群に後続する、大規模な集落が形成されている。

古墳時代には木田余台遺跡群に集落が形成され、継続する。前、中期は東台遺跡（8）、宝積遺跡（10）が、後期は榎買場遺跡（6）、御冥遺跡（7）が中心となる。また、東台古墳群（9）は後期～終末期を中心とする古墳群で、墳丘は削平されていたものの、前方後円墳、帆立貝形古墳が多く検出されている。木田余台から南西の字浅間台では、小型の前方後円墳である浅間塚古墳（2）が存在している。さらに、浅間塚西遺跡（3）では古墳時代前期の滑石製管玉の工房が発見されている。

奈良・平安時代には台地西側の榎買場遺跡（6）、御冥遺跡（7）で多くの堅穴建物跡が検出されている。榎買場遺跡（6）では青銅製の帯金具（丸柄）が出土しており、役人の存在が示唆される。なお、当地域への仏教伝来を示すものとして、榎買場遺跡で1基、宝積遺跡では3基の蔵骨器が検出されているが、詳細は不明となっている。

中世には、御冥遺跡（7）で地下式坑が検出されている。また、木田余城跡（5）は小田氏の配下、信太範宗が築城した戦国時代の平城である。昭和59年にJRの操車場となり、現在では中城、南堀などの地名が残る。手野城跡（14）では土塁や堀が残っている。また、発掘調査で出土したものではないが、青麻神社の脇では土師質の甕に取められた埋蔵銭が発見されている。

近世では発掘調査によって検出された遺物、遺構は少ない。市内で浅間台一字一石経塚に関連する遺跡として、第2図の図幅外であるが、木田余地区の東に隣接する手野地区の正東院において、一字一石経塚が発見されている。やはり法華経を書写したものである。また、後述する沖宿地区の入ノ上

第1表 木田余地区周辺遺跡一覧表

番号	遺跡番号※	遺跡名	時代
1	478	浅間台一字一石経塚	近世
2	202	浅間塚古墳	古墳
3	250	浅間塚西遺跡	古墳
4	201	八坂前遺跡	縄文・古墳
5	447	木田余城跡	中世
6	200	榎買場遺跡	旧石器・縄文・古墳・奈良平安
7	199	御冥遺跡	旧石器・縄文・古墳
8	292	東台遺跡	旧石器・縄文・弥生・古墳
9	262	東台古墳群	古墳
10	195	宝積遺跡	旧石器・縄文・弥生・古墳・奈良平安
11	196	宮脇遺跡	奈良平安
12	197	宮崎遺跡	奈良平安
13	248	一丁田台東遺跡	縄文・奈良平安
14	434	手野城跡	中世

※土浦市遺跡地図での番号

遺跡では、遺構外から多字一石経石が1点出土している。

2. 沖宿地区（第3図、第2表）

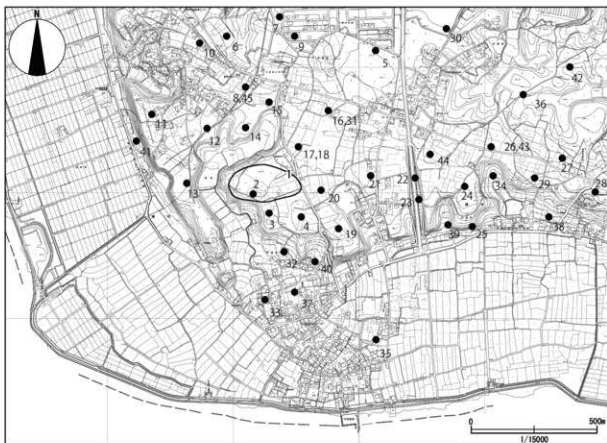
宮西A遺跡（1）が所在する沖宿地区は、隣接する田村地区とともに、土地区画整理に伴う大規模な発掘調査が行われている。

旧石器時代では、石橋南遺跡（9）において2か所のブロックが発見され、メノウ製の剥片や、硬質頁岩製のナイフ形石器などが出土している。入ノ上遺跡（22、23）からは、ローム層からの出土ではないが黒曜石製の剥片や石核などが検出されている。

縄文時代には前期を中心とした集落形成が認められる。尻替遺跡（30）では前期前半の竪穴建物跡1軒と土坑2基が検出されている。石橋南遺跡（9）ではハマグリを主体としハイガイ、マガキなどで構成される土坑内小貝塚が輸出されており、出土土器は小破片であるが早期後葉から前期前半の可能性がある。原山西遺跡（28）は、本市からかすみがうら市にまたがる部分が戸崎中山遺跡として発掘調査されており、縄文時代では前期の竪穴建物跡18件が確認されている。第3図の図幅外であるが、田村地区の前谷遺跡群や壺杯清水西遺跡でも前期の集落跡が検出されていることから、当該地域は縄文時代前期に盛んに利用されていたことがうかがえる。一方で、中期以降の遺構は少なく、八幡脇遺跡（5）で中期後半を中心とする竪穴建物跡6軒や陥穴などが検出されている。沖宿地区において、確実な後晩期の遺構はみつかっていない。

弥生時代には、入ノ上遺跡（22、23）において竪穴建物が1軒検出されている。

古墳時代では、前期と後期に集落形成が認められ、特に前期では各種工房が見つかったこと



第3図 沖宿地区の遺跡分布図（1:15000）

が特筆される。八幡脇遺跡(5)では、鍛冶工房跡と玉作工房跡を含む前期の集落跡が検出されている。鍛冶工房とされる第1号住居跡では鍛造剥片や鉄滓、砂鉄、羽口といった鍛冶関連遺物、粘土張りの鍛冶炉などが出土している。第4号、第6号、第8号住居跡からはメノウ、緑色凝灰岩、滑石といった素材の剥片や勾玉、管玉の未成品、砥石などが出土しており、古墳時代前期の玉作遺跡として、鳥山遺跡と並び重要な遺跡である。尻替遺跡(30)では、古墳時代前期の竪穴建物跡20軒などが発見されており、うち1軒からは鍛冶炉が検出されている。また、古墳時代後期の竪穴建物跡5軒も確認されている。入ノ上遺跡(22、23)は古墳時代から平安時代にかけての大集落で、古墳時

第2表 沖宿地区周辺遺跡一覧表

番号	遺跡番号※	遺跡名	時代
1	385	宮西 A 遺跡	縄文・奈良平安
2	450	宮西貝塚	縄文・中世
3	386	宮西 B 遺跡	旧石器・縄文・弥生・古墳・奈良平安・中世
4	387	宮西 C 遺跡	古墳・奈良平安
5	339	八幡脇遺跡	縄文・古墳・奈良平安
6	370	宮尻遺跡	古墳・奈良平安
7	372	金澤遺跡	旧石器・縄文・弥生・古墳・奈良平安
8	373	原ノ坊遺跡	縄文・古墳・奈良平安
9	374	石橋南遺跡	縄文・古墳・奈良平安
10	376	宮南遺跡	奈良平安
11	377	富士峰遺跡	縄文・古墳
12	378	原ノ坊南遺跡	古墳
13	379	峯久保遺跡	縄文・奈良平安
14	380	宮背古墳群	古墳
15	381	北ノ内 A 遺跡	縄文・奈良平安
16	382	北ノ内 B 遺跡	縄文・奈良平安
17	383	上縄遺跡	縄文・奈良平安
18	384	上縄貝塚	縄文
19	388	山ノ上遺跡	縄文・奈良平安
20	389	宮東遺跡	古墳・奈良平安
21	390	小森遺跡	縄文
22	391	入ノ上 A 遺跡	旧石器・縄文・弥生・奈良平安・中世
23	392	入ノ上 B 遺跡	縄文・古墳・奈良平安・中世
24	393	小山台遺跡	古墳・奈良平安・中世
25	394	大日塚	近世
26	395	三島遺跡	古墳・奈良平安・中世
27	396	三島東遺跡	縄文・古墳・奈良平安・中世・近世
28	397	原山西遺跡(戸崎中山遺跡)	縄文・古墳・奈良平安・中世・近世
29	398	道上遺跡	縄文・古墳・奈良平安
30	442	尻替遺跡	縄文・古墳・奈良平安・中世・近世
31	448	北ノ内貝塚	縄文
32	451	西妻遺跡	古墳・奈良平安・中世
33	452	坂本遺跡	古墳・奈良平安・中世
34	453	鷺内遺跡	古墳・奈良平安・中世
35	454	沖宿堀の内館跡	中世
36	455	出金遺跡	古墳・奈良平安・中世
37	456	海蔵寺遺跡	中世
38	457	親正堂遺跡	古墳・奈良平安・中世・近世
39	458	沖宿筆師遺跡	中世
40	459	久保内遺跡	奈良平安・中世・近世
41	461	天王松遺跡	奈良平安・中世
42	462	正久保遺跡	古墳・中世
43	463	三島貝塚	縄文
44	464	今宮古墳	古墳
45	466	原ノ坊古墳群	古墳

※土浦市遺跡地図での番号

代前期では9軒、中期では8軒、後期では24軒の堅穴建物が発見されている。原山西遺跡(28)では堅穴建物跡85軒、方形溝溝墓1基、古墳2基、土坑2基が確認されており、これらのうち堅穴建物、方形溝溝墓、土坑は前期、古墳2基は後期から終末期に位置付けられている。石橋南遺跡(9)では後期の堅穴建物跡が18軒検出されている。宮西A遺跡(1)に隣接する宮西C遺跡(4)では、古墳時代後期の堅穴建物跡1軒が発見されており、緑色凝灰岩製の管玉が出土している。

奈良・平安時代には、入ノ上遺跡(22、23)で、平安時代を中心とする堅穴建物跡68軒、掘立柱建物跡9棟、溝1条、土坑200基以上がされており、前代から引き続き大集落が形成されている。灰釉陶器など搬入品、八稜鏡や丸柄といった青銅製品、「青毛」と墨書された土器など、多彩な遺物が出土している。また、沖宿地区ではこの時期の火葬墓が多く検出されていることが特筆される。八幡脇遺跡(5)では平安時代の堅穴建物跡1軒、溝1条に加え、同時代の7基の火葬墓が発見されている。これらは須恵器、土師器、灰釉陶器を骨蔵器として、土坑に埋納したものである。遺存した人骨の鑑定の結果は、いずれも成人で女性4例、男性2例、性別不明が1例であった。石橋南遺跡(9)においても火葬墓2基、土壙墓1基が検出されている。尻替遺跡(30)では、火葬墓3基、土壙墓1基、土坑1基が検出されており、火葬墓の1基には鉄製の鑿先が副葬されていた。

中世では、入ノ上遺跡(22、23)で掘立柱建物跡2軒、方形堅穴状遺構4基、地下式坑1基などが発見されている。これらのうち土坑7基には馬が埋葬されており、前代の墨書土器「青毛」や、当地域が平安時代末期から中世の「南野牧」であったことと合わせて特筆される。原山西遺跡(28)では、掘立柱建物や、古墳を再利用した塚、溝跡などが検出されており、多数の五輪塔の部材が出土している。土壙墓、火葬墓も多数検出されていることから、塚を核とした墓域であったと考えられている。

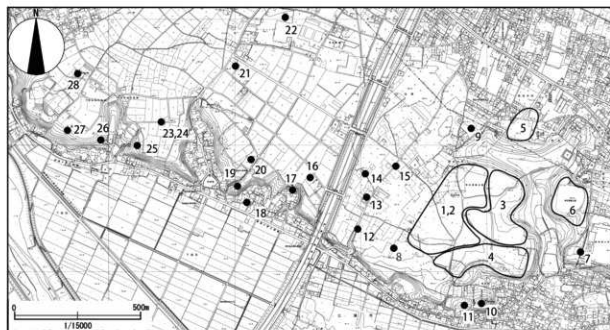
近世では、尻替遺跡(30)において掘立柱建物跡1棟と堅穴遺構2基が検出されている。井戸も発見されており、瀬戸美濃系の天目茶碗などが出土している。また近現代の遺構として、炭焼き窯が2基検出されている。

3. 常名・坂田地区(第4図、第3表)

北西原遺跡(1)が所在する常名地区では、運動公園建設に伴い、大規模な発掘調査が行われている。また、西に隣接する坂田地区でも県営畑地総合整備事業に伴い、発掘調査が行われている。

旧石器時代では、常名地区の山川古墳群(4)で楔形石器、台形椀石器といったいわゆる前半期石器群とともに、炉が検出されている。炉から採取した炭化物の¹⁴C年代測定値は約36,000年前(cal. B.P.)を示し、石器の年代観とも無矛盾である。北西原遺跡(1)、神明遺跡(3)、弁才天遺跡(6)ではナイフ形石器が出土している。

縄文時代では、草創期の土器は発見されていないものの、山川古墳群(4)でこの時期の有茎尖頭器が出土している。早期以後、縄文海進により霞ヶ浦に内湾が形成されると、坂田地区には多くの貝塚が残されるようになる。下坂田塙台遺跡(26)では、市内で最も古い早期末～前期初頭の貝塚が発見されている。これは土坑内に形成された地点貝塚で、ハイガイ、マガキを主体とする。赤弥堂遺跡(17)では、堅穴建物内に縄文時代前期の貝層が形成されている。中期では貝塚の形成はやや低調となる一方、赤弥堂遺跡において多数の堅穴建物跡が検出されている。また、常名地区でも神明遺跡(3)で同時期の堅穴建物跡が検出されており、中期には集落規模が大きくなったことが伺える。



第4図 常名・坂田地区の遺跡分布図 (1:15000)

後晩期には竪穴建物跡こそ明瞭に検出されていないものの、下坂田中台遺跡、下坂田貝塚(23、24)において後期後葉から晩期前葉に特徴的な、円筒形の深い土坑が検出されている。これらの土坑には、汽水域に生息するヤマトシジミを主体とする貝層が形成されている例もあり、桜川下流の環境が、海から河口域へと変化したことを示唆している。

弥生時代の遺構、遺物は希薄である。常名地区では、北西原遺跡(1)で1軒、や山川古墳群(4)で2軒の竪穴建物跡が検出されている。一方坂田地区では、分布調査や試掘確認調査で土器片が確認されているのみであり、遺構は確認されていない。

古墳時代の遺跡は集落跡、古墳ともに多い。まず常名地区の集落遺跡に注目すると、前期では北西原遺跡(1)と神明遺跡(3)を合わせて100軒以上の竪穴建物跡が、谷を挟んで東側に立地する弁才天遺跡(6)では13軒の竪穴建物跡が発見されている。中期には遺構、遺物ともに希薄となるが、後期は再び集落規模が拡大し、弁才天遺跡(6)を中心として竪穴建物跡が検出されている。

常名地区には山川古墳群(4)と北西原古墳群(2)の2つの古墳群が存在する。前者は前期の方墳を中心とする、33基の古墳から成る古墳群である。その内訳は、未調査の1基を除くと、前期の方墳が20基、円墳1基、中期の円墳5基、方墳1基、後期の帆立貝式前方後円墳2基、終末期の円墳2基、前方後方墳1基である。北西原古墳群(2)は、今回調査した5号墳を含めると、5基の終末期の方墳で構成される。北西原古墳群はいずれも同じ主軸で築造されており、周溝から墓道が伸びる横穴式石室を持つという特徴がある。さらに、両古墳群の南には、墳丘形態から前期と考えられている前方後円墳の常名天神山古墳(10)が立地する。

坂田地区では、赤弥堂遺跡(17)で前期・中期・後期の竪穴建物跡が、下坂田塙台遺跡(26)で前期と後期の竪穴建物跡が確認されており、前期の例が最も多い。古墳(群)としては坂田塙台古墳群(27)、下坂田向山古墳群(16)、下坂田八幡神社古墳群(19)、坂田台山古墳群(25)、武者塚古墳群(28)などが存在する。

坂田台山古墳群(25)は3基からなり、1号墳(屋敷塚古墳)は昭和39(1964)年に國學院大學と土浦第二高等学校によって主体部の調査が行われている。平成23(2011)年から24(2012)年にかけて墳丘の東側で発掘調査が行われ、周溝の一部が確認されている。

坂田台山古墳群から谷を挟んで西には、坂田塙台古墳群(26)が存在する。15基の古墳で構成され、2号墳(武器八幡古墳)は江戸時代末に鉄製武器が出土したと伝えられる。平成26年に筑波大学先史学・考古学研究室によって確認調査が行われ、既出土資料と接合する横剥板鉄留短甲の破片や、鉄剣などが出土している(滝沢ほか2016)。8、14、15号墳は平成23(2011)年から24(2012)年にかけて発掘調査され、8号墳からは5世紀末葉、14、15号墳からは6世紀の円筒埴輪が出土している。11号墳は全長約30mの前方後円墳であり、筑波大学によって測量が実施されている。坂田塙台古墳群の北には武者塚古墳群(28)が存在する。1号墳、2号墳ともに墳丘は削平されているものの、終末期に位置づけられる1号墳からは、「美豆良」に結った古代人の頭髪や、銀帯状金具、銀装や銅装の大刀といった豊富な副葬品が出土した。これらの出土品は国の重要文化財に指定されている。

第3表 常名・坂田地区周辺遺跡一覧表

番号	遺跡番号※	遺跡名	時代
1	238	北西原遺跡	旧石器・縄文・古墳
2	294	北西原古墳群	古墳
3	237	神明遺跡	旧石器・縄文・古墳・中世
5	245	西谷津遺跡	古墳・奈良平安
4	235	山川古墳群	古墳
6	236	弁才天遺跡	縄文・古墳・奈良平安
7	212	天神脇遺跡	縄文・古墳・奈良平安
8	239	羽黒後遺跡	縄文
9	244	西谷津西遺跡	古墳
10	233	常名天神山古墳	古墳
11	234	瓢箪塚(挑戦塚)古墳	古墳(湮滅)
12	240	坂の上遺跡	縄文
13	241	小坂の上遺跡	縄文
14	242	中畑遺跡	縄文
15	243	アラク遺跡	縄文・中世
16	N001	下坂田向山古墳群	古墳
17	N003	赤弥堂遺跡	縄文・古墳・奈良平安・中世・近世
18	N121	下坂田屋敷内城跡	中世
19	N004	下坂田八幡神社古墳群	古墳
20	N002	下坂田馬場先貝塚	縄文
21	N120	下坂田荒匂遺跡	中世
22	N112	坂田稲荷山塚群	近世
23	N005	下坂田中台遺跡	縄文・古墳・奈良平安・中世・近世
24	N006	下坂田貝塚	縄文
25	N008	坂田台山古墳群	縄文・古墳・中世
26	N104	下坂田塙台遺跡	縄文、古墳、奈良・平安
27	N007	坂田塙台古墳群	古墳
28	N070	武者塚古墳群	古墳

※土浦市遺跡地図での番号

奈良・平安時代では、常名地区では前代に引き続き、弁才天遺跡（6）で多くの竪穴建物跡が確認されている。63軒の竪穴建物跡や11棟の掘立柱建物跡が検出されたほか、和同開珎や帯金具（丸柄）といった銅製品が検出されていることが特筆される。西谷津遺跡（5）の第1次調査では、12軒の竪穴建物跡が確認され、帯金具（巡方）が出土している。坂田地区では、下坂田高台遺跡（26）で8軒の竪穴建物跡と3棟の掘立柱建物跡などが確認されている。赤弥堂遺跡（17）では7軒の竪穴建物跡が検出されている。

中・近世では、常名地区の山川古墳群（4）や神明遺跡（3）の範囲に、東西125m、南北103mの溝が検出されており、方形館跡と考えられている。坂田地域では、下坂田高台遺跡（26）で方形竪穴遺構が、赤弥堂遺跡（17）では道路状遺構が確認されているほか、内耳鍋などの遺物が出土している。下坂田中台遺跡（23）では中世の土壇墓、馬埋納遺構、井戸などが確認されている。

引用文献

- 茨城県教育財団編2004『戸崎中山遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第218集 茨城県教育財団
宇野沢昭・磯部一洋・遠藤秀則・田口雄作・永井茂・石井武政・相模輝雄・岡重文1988『2万5千分の1 筑波研究学園都市及び周辺地域の環境地質図』地質調査所
- 窪田恵一2006「土浦市木田余台遺跡群の旧石器時代～縄文時代草創期石器の研究」『土浦市立博物館紀要』土浦市立博物館 pp.1-14
- 毛野考古学研究所編2013『坂田台山古墳群・下坂田中台遺跡・下坂田貝塚』土浦市教育委員会
神明遺跡第五次調査会2005『神明遺跡（第5次調査）』土浦市教育委員会
上高津貝塚ふるさと歴史の広場編2010『宮西C遺跡』『上高津貝塚ふるさと歴史の広場年報第15号』上高津貝塚ふるさと歴史の広場 pp.42-47
- 滝沢 誠・大村冬樹・加藤千里・久永雅宏・齊木 誠2016「土浦市武具八幡古墳の発掘調査」『筑波大学先史学・考古学研究』第27号 47-64頁
- 土浦市遺跡調査会編1991『木田余台I』土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会編1997『石橋南遺跡』土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会編1997『入ノ上遺跡』土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会編1998『神明遺跡（第1次・第2次調査）』土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会編2002『木田余台II』土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会編2004『北西原遺跡（第3次・第4次調査）・山川古墳群（第1次調査）』土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会編2004『北西原遺跡（第1次調査）』土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会編2006『弁財天遺跡・北西原遺跡（第5次調査）』土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会編2007『尻替遺跡』土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会編2009『八幡脇遺跡』土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会編2011『浅間塚西遺跡・房谷遺跡・内出後遺跡（第1次調査）』土浦市教育委員会
東京航業研究所編2014『下坂田中台遺跡』土浦市教育委員会
西谷津遺跡調査会編2003『山川古墳群確認調査・西谷津遺跡・北西原遺跡（第6次調査）・神明遺跡（第4次調査）』土浦市教育委員会

常名台遺跡調査会編2002「常名台遺跡群確認調査・神明遺跡（第3次調査）」土浦市教育委員会
勾玉工房Mogi編2009「赤弥堂遺跡（東地区）」土浦市教育委員会調査」土浦市教育委員会
勾玉工房Mogi編2010「赤弥堂遺跡（中央地区）」土浦市教育委員会
勾玉工房Mogi編2011「赤弥堂遺跡（西地区）」土浦市教育委員会
勾玉工房Mogi編2013「下坂田塙台遺跡・坂田塙台遺跡群」土浦市教育委員会
三浦英樹1995「第四紀土壌研究の方法論に関する試論—特に堆積土壌を中心として—」近堂祐弘教授退官記念論文集刊行会編「近堂祐弘教授退官記念論文集」帯広畜産大学畜産環境科学科土地資源利用学講座 79-94頁
山川古墳群第二次調査会編2004「山川古墳群（第2次調査）」土浦市教育委員会
山川古墳群第三次調査会編2007「山川古墳群（第3次調査）」土浦市教育委員会

第3章 浅間台一字一石経塚

第1節 調査の概要

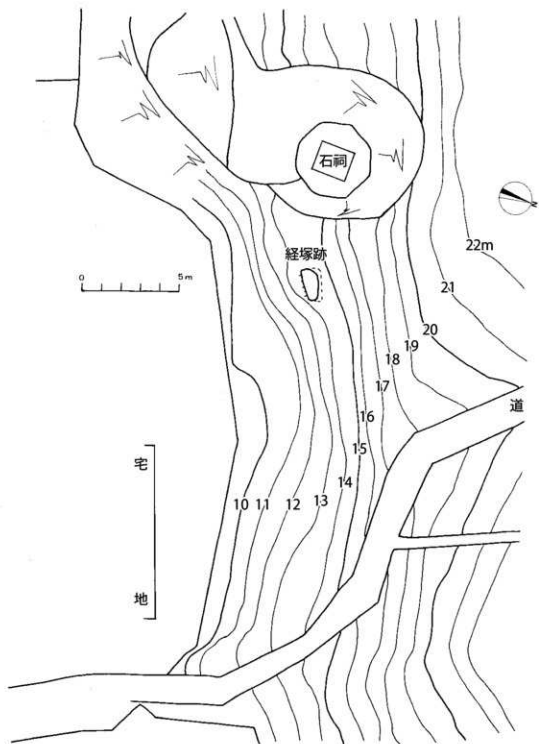
浅間台一字一石経塚は茨城県の急傾斜地対策工事に伴う樹木の伐採、伐根により、不時発見された遺跡である。経石は、墨書への影響を考え当初はブラッシングだけで水洗せずには読解を行ったが非常に効率が悪く、土のう袋10袋程度進めた後で水洗後に読解する方法に変更した。なお第7章で後述するが、当経塚は既に『土浦市史』（昭和50年刊行）において市内所在の一字一石経塚として記載されて以後詳細不明となっていた遺跡が再発見されたものである。

当経塚の同一台地上には、全長32mの前方後円墳である浅間塚古墳と浅間塚西遺跡がある。後者では昭和63（1988）年に一部発掘調査が行われ、古墳時代前期の滑石製管玉の玉作工房跡を発見した。台地下には戦国時代に活動が確認される木田余城跡がある。同城は、中世に常陸南部を支配した小田氏の重臣信太氏の居城で、佐竹氏や上杉氏による小田城（つくば市）落城時に幾度か小田氏治が退避した。霞ヶ浦に突き出した微高地上にあり、城の大部分は昭和50年代のJR常磐線の車両基地建設及び区画整理事業に伴い湮滅している。江戸期には土浦藩が城跡の保全のため、木田余東台の台地上にあった宝積寺を移設した。寺は明治期に蒸気機関車が排出する火の粉により罹災焼失した後は現在地に移動したと伝える。

遺跡の立地として当経塚は、台地斜面に造営された点が特異である。経塚の存在は、寺院・墓地の内部に営まれる場合や、台地上に石造物等が存在すればその存在を予想することができるが、今回は地元で伝承もなく、地表に表徴物も無く、偶発的な発見である。発見は樹木の伐採後に台地斜面が露出した状況であったことと、経石崖下の民家に落下したことに起因するが、本来はもっと台地が南側に継続し、経石を埋める土坑を掘れるだけのせり出した平場が形成されていたものと推定される。長年に及ぶ崖面の崩落進行によって平場が次第に失われ経石の落下が進み、今回の工事によって発見されたと考える。

なお当経塚東側に接して、台地から低地に向けて東に進む道がある。この道の中程から西に折れる形で小道の痕跡がみられ、この延長上に経塚上面の平場が位置している。ただしこの小道も平場も遺存状態は悪く、樹木の根の部分でだろうじて判別できる程度でしかない。この道は古くから存在していたようで、土地所有者からの聞き取りによれば、道を下りきった先の低地部は「弘法様」と呼ばれており、弘法大師堂等の小堂宇があった可能性が想定できる。また斜面から台地上の小字は「浅間台」といい、富士山浅間神社等何らかの信仰に関わる地名と推定される。当経塚から東南へ霞ヶ浦を望むと、石田の集落から湖岸の先までが一望できる。東からの日の出を仰ぐことができ、南に大きく開いて西に日没を臨むことのできる好景地を選んで、この経塚を造営したことが理解される。

埋経のための土坑は、赤褐色から灰褐色の砂層を地山として掘り込まれている。台地本体は表土下に関東ローム層、常総粘土層、浅海性の砂層である木下層・上岩橋層と連続する。経塚の存在する台地中腹部の標高が約15m前後であるため、掘り込まれた層位は木下層相当と考えられる。経石として用いられた川原石は、台地構成層位や低地周辺の桜川河口部に起因する可能性は乏しい。桜川上中流域または他所からの搬入の可能性も検討する必要がある。



第5図 浅間台一字一石経塚 測量図

第2節 発見された遺構と遺物

1. 遺構について

当経塚は、霞ヶ浦に臨む標高約25mの台地斜面部に位置し、経塚自体の標高は約15mを測る。経石を埋納した土坑は、長径約1.8m、短径約1.4m、深さ約1.3mの隅丸方形を呈する。経石は約65cm堆積し、その上に墨書の無い礫を交えた黒色土が約65cm堆積する。経石の上層の礫には墨書が無く、比較的大型のものが多い。

作業に危険が伴うことから、経石の細部の堆積状況は記録にとることができなかった。土坑内の経石調査と土坑覆土掘削時の所見では、最下層から埋経の趣旨を記した多字一石の出土が目立った。これらを踏まえると、土坑の最下層に多字一石（後述A種）を入れ、続いて一字一石経を投入し、最後に墨書の無い礫を埋め立て土と共に埋めたと考えられる。無墨書の礫は、本来は経石記入のために集積したものであったが、記述には足りたために処分の意味も含めて埋めたものかもしれない。

土坑の周囲は上面で僅かな平場が形成されているものの、人間が1～2人立てる程度の広さでしかない。土坑直下から斜面が急角度で傾斜していることから、本来は南側に台地が継続し、より広く平場が形成されていたが、経塚形成以後現代に至るまで、徐々に崖面の崩落が進み、平場が失われたものと推定される。結果として、『土浦市史』掲載時点では斜面地は不詳な状態だが既に平場は失われて、経石の出土が確認されたものと思われる。調査時には、台地上又は低地からの経塚への進入路は確認されなかった。

2. 遺物について

出土した経石は土のう袋にして約200袋を数えた。内訳は、墨書のある礫1448kg（うち判読可能な礫623.5kg、判読不可の礫824.5kg）、墨書の無い礫724.5kgの合計2172.5kgを計る。墨書のある礫の90%以上は一字一石だが、ごく一部に多字一石が見られた。経石内及び土坑覆土中から、数点土器等も出土している。

一字一石については、出現文字数が多量となるため全文字を記述することは控え、最も頻度の高い字を集計した。当経塚出土経石の中で、上位30位までの出現点数を第4表に示す。

このうち最多の「佛」字の墨書礫には、文字の下位に蓮華の側面観を描くものが一部にあり、以下に詳述する。

(1) 蓮華座をもつ「佛」字礫

この墨書礫は、石を縦長に用い、下部に蓮華座の側面観を描出し、上部に楷書で「佛」字を記したものである。当経塚では30位の蓮華座をもつ「佛」字礫が確認された。本来の「佛」の総画数は7画だが、5画目を4画目と繋げずに「ワ」のように記すことから、今回出土した全ての「佛」字礫の総画数は8画である。その内、蓮華座の花弁の描出や「佛」の書体が不明瞭な2点〔PL3・29・30〕を除く28点を対象として、蓮華座花弁数を基にA・B・Cの3型式に分類した。第6図には代表例のみを実測・掲載し、PL1には全30点を掲載している。

第4表 浅間台一字一石経塚において出現頻度の高い文字（上位30位）

佛 331	是 303	諸 271	無 205	不 193	於 192	法 188	一 183	衆 182	人 180
如 174	大 168	為 165	説 160	所 152	有 149	生 141	得 135	菩 134	以 130
而 129	若 118	三 110	我 109	其 108	薩 105	此 104	尊 100	見 99	之 97

A型式は花卉が7葉で、中心の花弁から左右に3葉ずつ描出し、花卉に接合する下方の葉はそれとほぼ同数枚確認できるものである〔第6図1・2、PL3-1~4〕。B型式は花卉が5葉で、3葉の花弁を描出後、各々の間に花卉を追加する描き方で、下方の葉の枚数は2枚に統一されているものである〔第6図3~6、PL3-5~13〕。C型式は花卉が3葉で、下方の葉の枚数は2枚に統一されるものである〔第6図7~10、PL4-14~28〕。

更に、各型式の中で「佛」の書体を基に3種に細分した。1種は6画目が止めからハネの順に書かれ、最終8画目にハネが認められないものとした。2種は6画目が折れからハネの順に書かれ、8画目にはハネが認められないものとした。3種は6画目が折れからハネの順に書かれ、8画目にはハネが認められるものとした。上記の花弁と佛書体の分類基準は原則であり、資料の細部によっては多少の個体差が認められる。

細分の結果、A型式には4点の石経が該当し、1種は4点〔第6図1・2、PL3-1~4〕が認められたが、2種・3種に該当するものは確認できなかった。第6図1〔PL3-1〕は、蓮華座が7葉に対して葉が8枚確認でき、どちらにも筋が細かく描出され、茎も見受けられる。「佛」書体は1種の特徴を呈する。2〔PL3-2〕は、蓮華座が7葉に対して葉が6枚確認でき、どちらにも所々筋が描出され、茎も見受けられる。「佛」の書体は8画目のハネが認められるものの、7・8画目の筆の運び方に共通点が見受けられたので、同種とみなした。

B型式には8点の石経が該当し、1種は2点〔第6図3、PL3-5・6〕、2種は2点〔第6図4、PL3-7・8〕、3種は4点〔第6図5・6、PL3-9~13〕認められた。このうち第6図3〔PL3-5〕は、蓮華座の花弁に筋が見受けられ、茎と思われる半円状の線が横位に2本描出される。4〔PL3-7〕は、蓮華座の花弁に筋が見受けられ、茎と思われる半円状の線が縦位に2本描出される。5〔PL3-11〕は、全体的に細い線で描出され、蓮華座の花弁が「し」を2つ組み合わせた輪郭を用い、その中に筋が描出される。茎は太めの線で縦位に1本確認できる。6〔PL3-9〕は、蓮華座の花弁に筋が見受けられ、茎と思われる半円状の線が横位に2本描出される。

C型式には17点の石経が該当し、1種は3点〔第6図7、PL4-14~16〕、2種は4点〔第6図8、PL4-17~20〕、3種は9点〔第6図9・10、PL4-21~28〕が認められた。第6図7〔PL4-14〕は、蓮華座の花弁のみが見受けられ、花卉の筋や葉、茎は確認できない。8〔PL4-19〕は、蓮華座の花弁に筋が見受けられ、茎と思われる2本の横位線が重なって描出される。9〔PL4-24〕は、蓮華座の花弁に筋が見受けられ、茎は縦位に1本描出される。10〔PL4-23〕は、蓮華座の花弁に筋が見受けられ、茎と思われる半円状の線が2本描出される。

なお蓮華座をもたない「佛」字磔331点中、遺存状況の良いものは237点である。上記の「佛」書体の分類を基に1~3種に分類したところ、1種は100点、2種は85点、3種は46点確認できた。

また資料を観察すると、磔表面における文字と絵の割付から佛字が蓮華座に先行して書かれていることが看取された。資料のいずれも、佛字が表面からはみ出すことが無いのに対して、蓮華座は描かれる表面から外れて側面や下面にまで筆が至る資料が見受けられた。

上記を通観すると、文字及び蓮華座の描き方からは各々3タイプに分類可能である。A型式が1種のみで対応することを除き、ばらつきのある状況であることがわかる。これらの状況を解釈するならば書くことは共通するものの、A型式は同一人物が蓮華座と佛字を書き、B・C型式は佛字が乾い



第6図 浅間台一字一石塚出土經石(1)

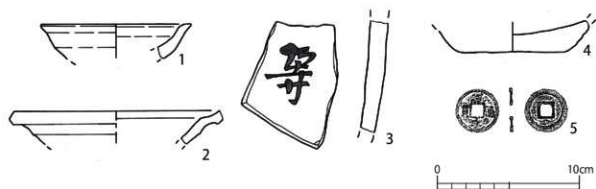
界□□□無釈迦牟尼佛」、他面に「六十六□□為十方六□四生七世父母 六親眷屬□□□□」
□」と記される。18〔PL5-6〕は一面に「為七世父母六親 眷屬□□□□」、他面に「□
六道四生□無統三 萬冥各善 提也」と記される。第9図19〔PL5-9〕は「妙法蓮華經 道空 妙
全 妙法蓮華經 道宗 妙清 妙法蓮華經 道慶 一相永眞 妙法蓮華經 道傘 □眼 妙法蓮華經
妙深 妙法蓮華經 □□ □□□□□□」と記される。

上記を通観すると、妙法蓮華經（法華經）を書写したことが、西新の菩提を引うことが目的と判じられ、複数の戒名が記されていることがわかる。ここでいう「西新」は人名・法名の可能性もあるが、別字をあてた可能性を想定して父母二親の両親として解釈しておく。戒名として、16には個人を指すと思しき「自慶禪定尼」と「本然性空禪定門」が同一面に記載される。他面にも判読できないが「禪定門」の記載があるため、一組のみの夫婦とは限らず、より多数の人物の菩提を引うことを意図していると考えられる。法名では、道空・妙全・道宗・妙清・道慶・妙深等、複数の人名の記載がある。経塚の造立者または経石を書写した僧と考えられる。

B種には合計17点〔PL6-1～13〕が認められた。内訳は、法華經信解品第四の中で2点〔PL6-1・2〕、同提婆達多品第十二の中で9点〔PL6-4～8〕、同如来寿量品第十六の中で5点〔PL6-9～13〕、同分別功德品第十七の中で1点〔PL6-3〕にわたる。文字数や礫の大きさは様々で、隙間無く礫の全体に文字を記すものと、2～5字程度の文字を記すものがある。B種間の礫同士の記載部分を照合すると、記載箇所が連続する石同士もあるが、記載箇所が近いものの連続しない石同士もみられる。

(3) その他の出土遺物

以下に礫石経以外の出土遺物を掲載する。礫石経以外では、土師質土器小皿（かわらけ）片1点〔第8図1、PL6下段-1〕、美濃産陶器片1点〔第8図2、PL6下段-2〕、中世陶器片を経石に転用したもの1点〔第8図3、PL6下段-3〕、土師器片1点〔第8図4、PL6下段-4〕、寛永通宝1点〔第8図5、PL6下段-5〕である。土師器は混入と考えられ、それ以外は近世のものである。



第8図 浅間台一字一石経塚出土遺物

第5表 浅間台一字一石経塚出土遺物観察表 (1)

No	器種	法量 (cm)	胎土/色調 /焼成	器形、技法、装飾等の特徴	備考 (出土位置, 残存率)
1	土師質土器 小皿	A (8.0) C (1.8)	良土/にぶい黄褐色/普通	体部及び口縁部片。丸みを帯びて立ち上がり、口唇部は面取りして外反する。口唇部付近内外面にススが付着し、黒色を呈する。	経石及び覆土中 10%
2	美濃 灰釉折縁輪 禿鉢	A (10.8) C (1.75)	精良/釉:灰白色 /堅緻	斜めに立ち上がる体部から外反する口縁部片。口唇部内外面はくびれ、口唇端部は面取られる。内外面全体に施釉。釉薬は透明感が高く、光沢をもつ。	経石及び覆土中 10%、18世紀中葉
3	渥美 壺甕類	残存長 (6.6) 残存幅 (4.9)	良土/内面:灰黄色。 外面:黄灰色 /堅緻	体部片。内面には指頭圧痕がみられるが、指紋が判然とする程鮮明ではない。外面に調整痕は認められない。内面に墨書「等」と記される。	経石及び覆土中 5%
4	土師器 壺甕類	B5.6 C (1.6)	直径0.5mm以下の 長石・微細な石英 を微量含む/内面: 黒褐色。外面:に ぶい黄褐色・にぶ い赤褐色/普通	底部片。内面全体にススが付着し、黒褐色を呈する。外面は被熱によるものか、一部赤褐色を呈する。混入である。	経石及び覆土中 5%

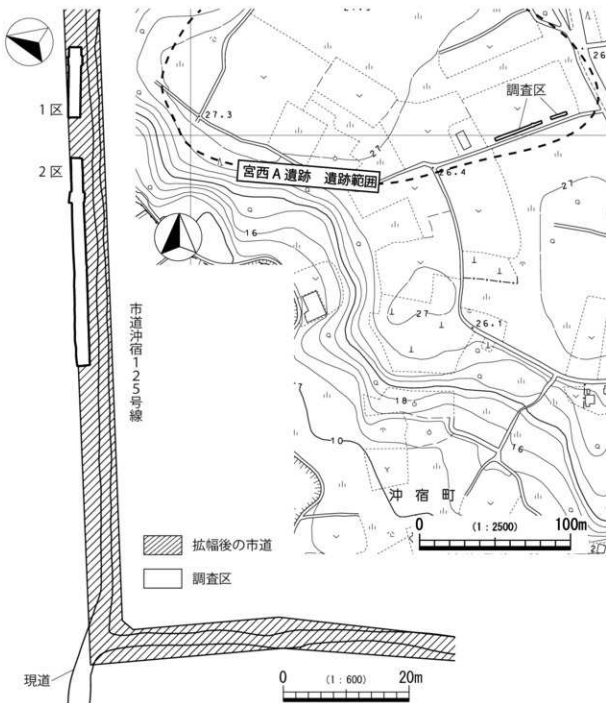
第6表 浅間台一字一石経塚出土遺物観察表 (2)

No	器種	法量 (mm・g)					備考 (出土位置, 残存率等)
		外径 (縦)	外径 (横)	内径 (縦)	内径 (横)	銭厚 重量	
5	銅製品 銭貨 寛永通宝	23.0	23.0	19.5	20.0	1.1 2.4	経石及び覆土中、100%、 新寛永 (1697~1747年、 1767~1781年の鑄造)

第4章 宮西A遺跡

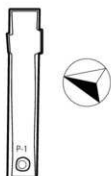
第1節 調査の概要

本調査は市道沖宿125号線道路改良工事に伴うものである（第1章参照）。試掘確認調査の結果から、道路拡幅部分に調査区1区（2×11m）と2区（2×33m）を設定した（第9図、第10図）。表土除去は重機で行い、関東ローム層上面を遺構確認面とした。



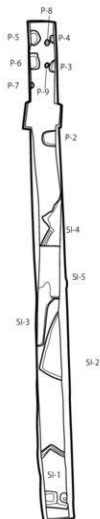
第9図 調査区の位置

第2節 発見された遺構と遺物



1区

2区



第10図 調査区全体図

調査の結果、平安時代の竪穴建物跡5軒、掘立柱建物の柱穴9基を検出した。

第1号竪穴建物 (SI-1、第11図)

位置 2区西端に位置する。

主軸 N-17° -E

規模 一辺4m程度の方形を呈すると考えられる。

壁 やや掘りすぎてしまっているが、確認面までの深さは40cm程度を測り、急角度で立ち上がる。

床 ほぼ平坦である。東側には幅20~25cm程度、深さ10cm程度の周溝が検出された。

ピット 南側に50×60cm程度の楕円形を呈するピットが検出された(P1)。立ち上がりが緩やかで、覆土中には焼土が認められたが、硬化した火床面はなかった。北側には一辺70cm程度の方形を呈するピット(P2)が検出されており、形状から貯蔵穴と考えられる。

カマド 検出されていない。

覆土 P1の覆土も含めると4層に分層された。6層はP1を埋め戻した堆積物。5層は埋め戻し後、形成された焼土。4層はロームを主体とする三角堆積物で、壁が崩れたものか。3層はロームブロックを含んでおり、人為的に埋め戻したものと考えられる。

遺物 (第12図、第7表) 1、2、3、5は内面黒色処理を施した土師器。10世紀代に位置づけられる。4は回転台成形の土師器坏、6、7は土師器甕で外面にケズリが認められる。8、9はタタキ成形の須恵器甕で、内面に同心円状の敲き目をもち、9世紀代か。10は土製紡錘車と考えられる。

所見 やや古手の須恵器も出土しているが、床面直上で出土した5や7といった遺物から考えて、10世紀の竪穴住居跡と考えられる。

第2号竪穴建物 (SI-2、第13図)

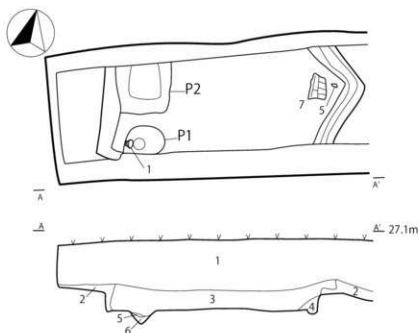
位置 2区中央南側に位置する。

主軸 N-1° -E

規模 一部しか検出できていないが、一辺4m程度の方形を呈すると考えられる。

壁 確認面からの深さは西側で15cm程度、東側で25cm程度であり、急角度で立ち上がる。

床 ほぼ平坦であり、周溝は検出されなかった。

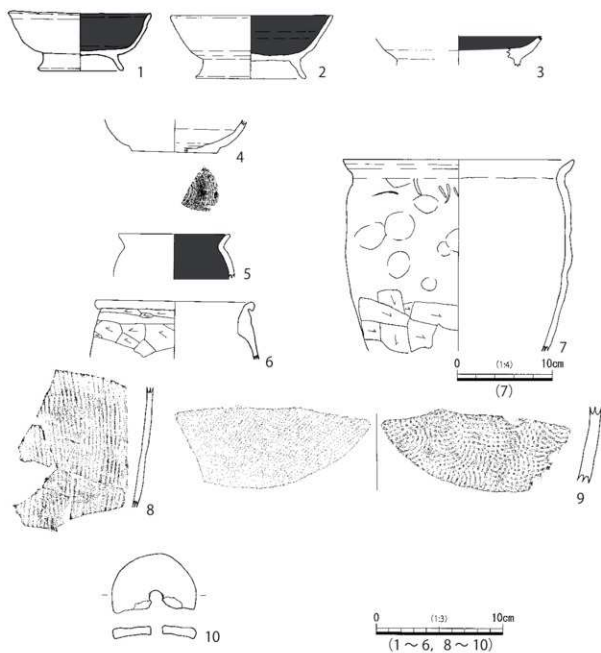


- 1 緑褐色 (7.5YR2/3) 砂質シルト層からなる耕作土。粘性弱、しまり弱。
- 2 褐色 (7.5YR4/6) 砂まじりシルト層。関東ローム層。粘性中、しまり弱。
- 3 直径 5cm 程度のロームブロックを含む褐色 (7.5YR3/4) 砂質シルト (土層)。S11 埋土。下位ほどロームブロックが多い。粘性弱、しまり中。
- 4 褐色 (7.5YR4/6) 砂まじりシルト層。ローム層を主体とし、黒土が混在している。粘性中、しまり中。
- 5 明赤褐色 (5YR5/6) シルト層。雑土。下底に炭化材が層状に分布する。粘性弱、しまり弱。
- 6 褐色 (7.5YR4/4) の砂まじりシルト層。ローム層と黒土が混ざったもの。粘性弱、しまり弱。

第 11 図 第 1 号竪穴建物

第 7 表 第 1 号竪穴建物出土遺物観察表

掲載番号	種類 器種	法量	胎土	色調	焼成	器形の特徴	技法の特徴
1	土師器 高台付杯	A11.7 B7.1 C4.9	長石、石英、雲母多量	内面黒色 外面にぶい黄褐色	良好	体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。高台は「ハ」の字に開く。	体部は回転台成形で、外面はナデ、内面は見込み部に丁寧なミガキ、他はナデ。底部を回転ヘラ切り後、高台を接合。内面から外面口縁部にかけて黒色処理。
2	土師器 高台付杯	A (13.2) B9.2 C5.1	長石多量、雲母、石英、赤色粒子少量	内面黒色 外面にぶい黄褐色	良好	体部は直線的に立ち上がる。高台は「ハ」の字に開く。	体部外面は回転ヘラケズリ後ナデ、体部内面はナデ後、見込み部にミガキ。底部は回転ヘラ切り後高台を付け、接合部にナデ。内面黒色処理。
3	土師器 高台付杯	C (2.75)	径 1mm 程度の長石多量、雲母微量	内面黒色 外面褐色	不良	高台は直線的にひらく。体部は直線的に立ち上がると思われる。	外面側下部は回転ヘラケズリ後ナデ。内面はナデ後、ミガキ、黒色処理を施す。その他の部位はナデ。
4	土師器 杯	B (7.05) C (2.6)	長石、赤色粒子多量、雲母微量	内面にぶい褐色 外面褐色	普通	平底。体部は丸みを帯びて立ち上がる。	底部は回転糸切り、体部は内外面とも回転ナデを施す。
5	土師器 壺	A (9.05)	長石、雲母微量	内面黒色 外面にぶい黄褐色	普通	体部は丸みを帯び頸部でくびれ、口縁部は「く」の字に外反する。	外面はナデ、内面はナデ後ミガキ、黒色処理を施す。
6	土師器 壺	A (12.45) C (4.6)	長石、石英多量、赤色粒子少量	ぶい黄褐色	普通	体部は直線的で、口縁部は外反する。	内面はナデ。外面は頸部に、向かって右から左へ横位のヘラケズリ後、ナデ。
7	土師器 壺	A (24.7) C (20.2)	長石多量、石英中量	明褐色	普通	体部はゆるい弧を描いて立ち上がり、口縁部は外反する。	内面は全体にナデ、頸部にヘラ削り。外面は胴下部にヘラ削り、胴中へ上部にかけて指による押圧痕を残す。頸部には縦位のヘラ削り、口縁部にはヨコナデを施す。
8	須恵器 壺	—	長石少量、雲母多量	内面オリーブ黒 外面灰色	普通	壺の体部片。	体部外面に縦方向の平行線の叩き目。内面は未調整で粘土紐の縦ぎ目や指で押さえた後が残る。
9	須恵器 壺	—	長石微量	灰色	普通	壺の体部片。	外面になめ格子状の叩き目。内面に同心円状の当て具痕。
10	土製品 紡錘車	A7.0 B8.4 重量 30.0g	石英、長石中量、雲母多量	褐色	普通	中央がわずかに高くなる円盤状を呈する。	表裏面ナデ、裏面は特に丁寧。



第12図 第1号竪穴建物出土遺物

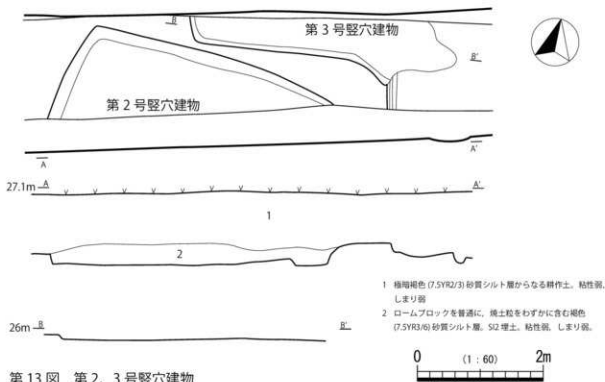
ピット 平面形はとらえられなかったものの、断面図に認められる方形の掘り込みは貯蔵穴の可能性
がある。

カマド 検出されていない。

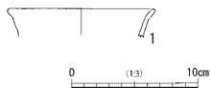
覆土 1層で構成されている。ロームブロックを含むため埋め戻したものか。

遺物(第14図、第8表) 図示したものは回転台成形の土師器杯である。図示できなかった遺物は
内面黒色処理の土師器、須恵器の小片などであり、おおむね同時期ものと考えられた。

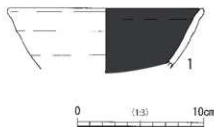
所見 出土遺物から平安時代の竪穴住居跡と考えられる。



第13図 第2, 3号竪穴建物



第14図 第2号竪穴建物出土遺物



第15図 第3号竪穴建物出土遺物

第8表 第2号竪穴建物出土遺物観察表

掲載番号	種類 器種	法量	胎土	色調	焼成	器形の特徴	技法の特徴
1	土師器 環	A (12.0) C (2.5)	長石多量	橙色	普通	体部は直線的に立ち上がり、 口縁部はわずかに外反する。	内外面ともナデ。

第9表 第3号竪穴建物出土遺物観察表

掲載番号	種類 器種	法量	胎土	色調	焼成	器形の特徴	技法の特徴
1	土師器 環	A (16.0) C (5.0)	長石中量、霞母 少量	内面黒色 外面にふい黄 褐色	普通	体部は直線的に立ち上がる。	外面は回転ナデ。内面は回転ナデ 後、ミガキによる平滑化し、黒色 処理を施す。

第3号竪穴建物 (SI-3、第13図)

位置 2区中央北側に位置する。第5号竪穴建物との新旧関係が判然としないが、硬化面が第5号竪穴建物の覆土中にはみ出すように認められたことから、本跡のほうが新しいと考えられる。

主軸 N-5° -W

規模 残存する硬化面から、一辺4m程度の方角を呈すると考えられる。

壁 明確に検出できなかった。確認面からの深さは8cm程度である。

床 ほぼ平坦である。周溝は検出されなかった。

ピット・カマド 検出されなかった。

覆土 掘り込みが浅く、表土除去段階で床が出ており、明確にとらえられなかった。

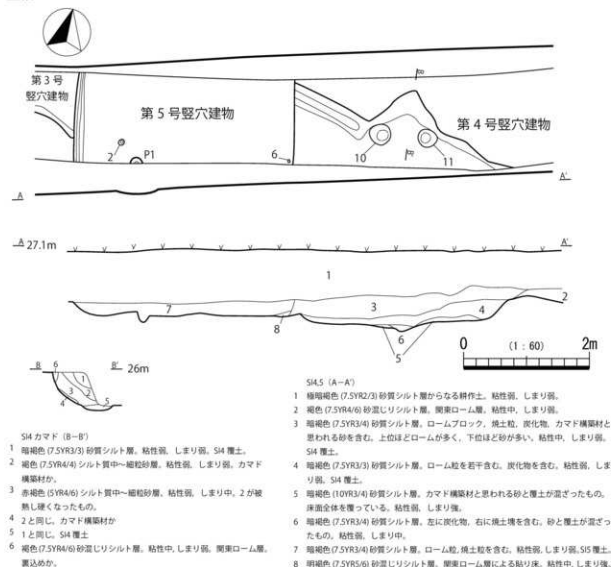
遺物 (第15図、第9表) 内面黒色処理を施した土師器杯を図示した。その他の遺物は土師器の小片などであり、おおむね同時期のものと考えられた。

所見 出土遺物から平安時代の竪穴建物と考えられる。

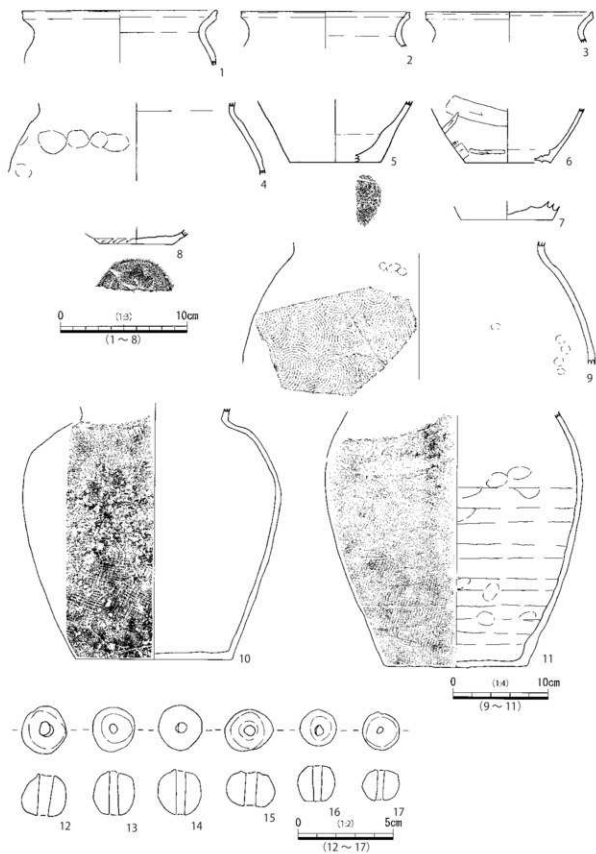
第4号竪穴建物 (SI-4、第16図)

位置 2区中央南側に位置し、第5号竪穴建物に切られる。

主軸 N-4°-W



第16図 第4,5号竪穴建物



第17图 第4号竖穴建物出土遺物

第10表 第4号竪穴建物出土遺物観察表

掲載番号	種類 器種	法量	胎土	色調	焼成	器形の特徴	技法の特徴
1	土師器 壁	A〔16.0〕 C〔4.4〕	長石多量、雲母 中量	内面黒褐色 外面にふい赤褐色	普通	口縁部は断面S字形を呈する。	内外面ともナデ。外面は二次焼成により器表面剥落。
2	土師器 壁	A〔14.0〕 C〔2.9〕	長石多量、雲母 中量	内面黒色 外面明赤褐色	普通	口縁部は断面S字形を呈する。	内外面ともナデ。
3	土師器 壁	A〔13.8〕 C〔3.4〕	長石多量 雲母微量	赤褐色	普通	口縁部は断面S字形を呈する。	内外面ともナデ。
4	土師器 壁	C〔6.5〕	長石、石英多量、 雲母少量	内面にふい黄褐色 外面にふい褐色	普通	体部は丸みを持って立ち上がり、頸部から外反する。	内外面にナデ調整を施す。外面胴上部には指で押さえた痕跡が認められる。
5	土師器 壁	B〔7.6〕 C〔5.0〕	長石多量、雲母 少量	内面オリーブ黒色 外面黒色	不良	底部は平底で、木葉痕を残す。体部は直線的に立ち上がる。	内外面ともナデ調整。
6	土師器 壁	B〔7.0〕 C〔4.3〕	長石多量、石英、 雲母少量	内面褐色 外面にふい褐色	普通	体部はわずかに丸みを持って立ち上がる。	外面は多方向からのケズリ。内面はヘラでかきとった痕を残す。
7	土師器 壁	B〔7.6〕 C〔1.5〕	長石中量、雲母 微量	にふい黄褐色	普通	平底の底部片。	外面ナデ、内面に指で粘土をかきとった痕を残す。
8	須恵器 坏	B〔6.0〕 C〔1.1〕	長石中量、雲母 微量	灰色	良好	平底の底部片。	底部はヘラ切り後、多方向からのヘラ削り。体部外面はななめ方向のヘラ削り後、ナデ。内面はナデ。
9	須恵器 壁	C〔13.0〕	長石多量、雲母 中量	内面灰白色 外面灰色	不良	壁の体部片。体部は丸みを帯びて立ち上がり、頸部で外反する。	体部外面に同心円状の叩き目。内面は未調整。
10	須恵器 壁	B16.5 C〔26.6〕	長石中量、雲母 微量	灰色	二次焼成を受け不明	平底。体部は直線的に立ち上がり、頸部でくびれる。	体部外面に格子状のタタキ目、内面に当て具痕は無く、未調整。
11	須恵器 壁	B15.2 (27.0)	長石中量、雲母 微量	暗灰黄色	二次焼成を受け不明	平底。体部は丸みを帯びて立ち上がる。	外面はななめ方向の条痕の叩き目。内面に当て具痕は無く、指頭によるオサエ工痕が明瞭。
12	土製品 土玉	A2.47 B2.22 C2.16 11.2g	長石少量	にふい黄褐色	普通	孔径は約6～7mm。いびつな球形を呈する。	ナデ。
13	土製品 土玉	A2.33 B2.23 C2.27 10.6g	長石少量、雲母 微量	にふい赤褐色	良好	孔径は約5mm。いびつな球形を呈する。	ナデ。
14	土製品 土玉	A2.40 B2.33 C2.27 11.8g	長石少量、雲母 微量	褐色	良好	孔径は約5mm。いびつな球形を呈する。	ナデ。
15	土製品 土玉	A2.24 B2.62 C1.79 10.5g	長石微量	にふい黄褐色	普通	孔径は約6mm。上下がつぶれた扁平な球形を呈する。	ナデ。
16	土製品 土玉	A1.97 B1.92 C1.91 7.6g	長石微量	にふい黄褐色	普通	孔径は約5mm。ゆがんだ臼状を呈する。	上下端を切り取った後、ミガキ。その他はナデ。
17	土製品 土玉	A1.97 B2.02 C1.64 6.0g	長石少量	明赤褐色	不良	孔径は最長4.6mm。いびつな球形を呈する。焼きむらがあり、もろい。	表面はもろくなっており不明。二次焼成を受けた可能性がある。

規模 北辺の一部のみ検出されており、残存長は3m程度である。

壁 確認面からの深さは50cm程度を測り、セクション部分ではなだらかなものの、おおむね垂直に立ち上がる。

床 平坦だが、カマドの正面に当たる部分はややくぼんでいる。

ピット 検出されなかった。

カマド 北壁中央を40cmほど張り出して構築されている。被熱によって変質しているが、覆土には中～細粒砂が認められたことから、砂を多量に含むシルト～粘土を用いて構築されたと考えられる。両袖は輪郭が不明瞭であったが、ほぼ完形の須恵器甕（第17図10、11）が倒立した状態で据え付けられており、袖の一部として再利用されたと考えられる。覆土は天井や袖が崩落した状況を示しており、顕著に被熱赤変している。

覆土 床面全体をカマド構築材が崩落したと思われる砂がちの層（9層）が覆っており、その後8層、7層が堆積している。7層はロームブロックを含んでおり、埋め戻されたものか。

遺物（第17図、第10表） 1～7は土師器の甕で、口縁部は断面S字状を呈する。9世紀代。8は須恵器坏で、底部の切り離し痕をケズリ消している。9は同心円状の当て具痕が外面に認められるもので、8世紀代の遺物である。10、11はカマドの袖に転用された須恵器甕で、10は格子目状、11は斜め条線の敲き目が認められる。内面はともに当て具痕がなく、指によるオサエ痕が明瞭である。外面は顕著に被熱し剥落している。12～17は土玉。

所見 8世紀代の須恵器（9）が出土しているものの、カマドに使われた須恵器は9世紀代であることから、当該時期の竪穴住居跡と考えられる。

第5号竪穴建物（SI-5、第16図）

位置 2区中央、第4号竪穴建物を切って構築されている。第3号竪穴建物との切りあいが不明瞭なもの、床面の位置関係から本跡のほうが古いと考えられる。

主軸 N-7°-W

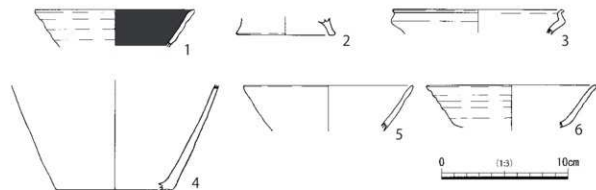
規模 残存する辺と辺の間の長さから考えて、一辺3.5m程度であると考えられる。

壁 確認面からの深さは30cm程度を測り、西側の立ち上がりは不明瞭であるが、東側は急角度で立ち上がる。

床 若干東側が高く、西が低いがほぼ平坦である。

ピット 南壁際に直径20cm程度、床面からの深さ10cm程度のピット（P1）が検出されている。柱穴の可能性がある。

カマド 検出されていない。



第18図 第5号竪穴建物出土遺物

第11表 第5号竪穴建物出土遺物観察表

掲載番号	種類 器種	法量	胎土	色調	焼成	器形の特徴	技法の特徴
1	土師器 坏	A〔14.0〕 C〔3.2〕	長石多量、石英、 雲母中量	内面黒色 外面にふい黄褐色	普通	丸みを帯びて立ち上がり、 口縁部でわずかに外反する。	外面はナデ。内面はナデ後、ミガキ、黒色処理。
2	土師器	B〔8.2〕 C〔1.4〕	雲母多量、長石、 石英中量	にふい橙色	良好	高台部	内外面ともナデ。
3	土師器 甕	A〔14.0〕	石英、長石多量	にふい黄褐色	普通	頸部から外反して立ち上がり、 口縁部は断面S字状を呈する。	内外面ともナデ。
4	土師器 甕	B〔9.6〕 C〔9.0〕	長石多量、石英、 雲母少量	内面オリーブ黒色 外面明赤褐色	二次焼成を受け不明	底部は平底。体部は直線的に立ち上がる。	体部外面は横位のケズリ、内面はナデ。外面にカマド構築材と思われる粘土質砂が付着。
5	須恵器 坏	A〔14.0〕 C〔3.2〕	長石、雲母中量	黄灰色	普通	丸みを帯びて立ち上がり、 口縁部でわずかに外反する。	内外面とも回転ナデ。
6	須恵器 坏	A〔13.0〕 C〔3.8〕	石英中量、雲母 少量	灰色	普通	直線的に立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。	内外面とも回転ナデ。

覆土 一部にローム層の貼り床が認められたほかは、ローム粒、焼土粒を含む堆積物で充填されていた。三角堆積などがみられなかったことから人為的に埋め戻したもののか。

遺物 (第18図、第11表) 1は内面黒色処理の土師器坏。2は土師器の高台部分。3、4は土師器甕で、4はカマド構築物と思われる粘土質の砂が付着し被熱していることから、第4号竪穴建物に帰属する可能性がある。5、6は須恵器坏。

所見 出土遺物から9世紀後半の竪穴住居跡と考えられる。

第1号柱穴 (P-1、第19図)

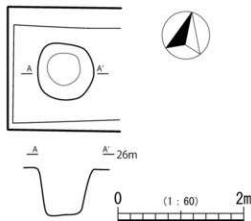
位置 1区西側で検出された。

規模と平面形 直径80～90cm程度のやや不整な円形を呈する。

断面形 底面は平坦で壁は急角度で立ち上がる。確認面からの深さは70cm程度で、底面は硬化している。

遺物 出土遺物はなかった。

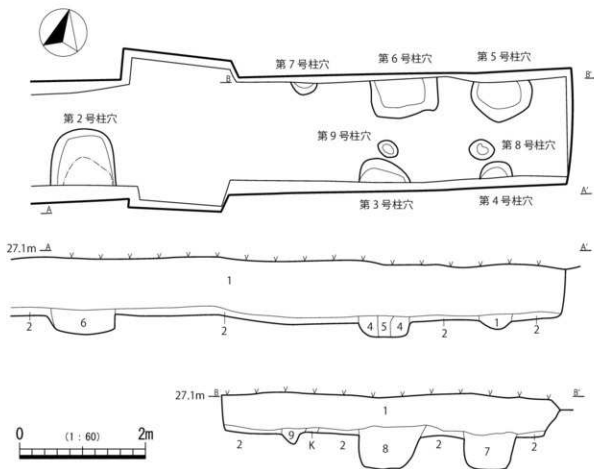
所見 規模と底面の硬化から、掘立柱建物跡の柱穴と考えられる。



第19図 第1号柱穴

第2号柱穴 (P-2、第20図)

位置 2区東側で検出された。



- 1 暗褐色(7.5YR2/3)砂質シルト層からなる耕作土。粘性弱、しまり弱。
- 2 褐色(7.5YR4/6)砂質シルト層。粘性中、しまり弱。関東ローム層。
- 3 暗赤褐色(5YR3/4)砂質シルト層。ロームブロック、煤土ブロック、炭化材を含む。粘性弱、しまり弱。P-4 覆土。
- 4 褐色(7.5YR4/6)砂質シルト層。ロームと黒土が混ざったもの。粘性弱、しまり中。P-3 覆土。
- 5 暗褐色(7.5YR3/4)砂質シルト層。直径2cmほどのロームブロックを含む。粘性弱、しまり弱。P-3の柱の痕跡。
- 6 暗褐色(7.5YR3/4)砂質シルト層。ロームブロック、炭化材を多量に含む。粘性弱、しまり中。P-2 覆土。
- 7 暗褐色(7.5YR3/4)砂質シルト層。ロームブロック、黒土。炭化物が混ざったもの。粘性弱、しまり弱。P-5 覆土。
- 8 褐色(7.5YR4/6)砂質シルト層。ロームブロック、黒土。炭化物が混ざったもの。黒土が層状に認められる。粘性弱、しまり弱。P-6 覆土。
- 9 暗褐色(7.5YR2/3)砂質シルト層。ロームブロックと黒土が混ざったもの。粘性弱、しまり弱。P-7 覆土。

第20図 第2～8号柱穴

規模と平面形 残存長1.3m×0.9m程度の不整な半円形を呈する。

断面形 床面はやや丸みを帯び、壁は急角度で立ち上がる。確認面からの深さは40cm程度、底面は硬化している。

覆土 ロームブロック、炭化物を多量に含んでおり、人為的に埋め戻したものと考えられる。

遺物 出土遺物はなかった。

所見 規模と底面の硬化から、掘立柱建物跡の柱穴と考えられる。

第3号柱穴 (P-3、第20図)

位置 2区東側、第6号柱穴と向かい合って検出された。

規模と平面形 残存長90×40cm程度の不整な半円形を呈する。

断面形 底面は平坦で、壁はやや丸みを帯びて立ち上がる。確認面からの深さは35cm程度である。

覆土 中央に柱の痕跡と思われるロームブロックを含む黒色土（5層）が認められた。覆土（4層）はロームブロックを多量に含んでおり、柱穴として機能していた時点での裏込めの可能性がある。

遺物 図示していないが、須恵器杯の破片が1点出土した。形態から平安時代のものである。

所見 規模と配置から、掘立柱建物跡の柱穴と考えられる。

第4号柱穴（P-4、第20図）

位置 2区東側、第5号柱穴と向かい合って検出された。

規模と平面形 残存長70×30cm程度の半円形を呈する。

断面形 底面は丸みを帯びており、壁は垂直に立ち上がる。確認面からの深さは25cm程度を測る。

覆土 ロームブロック、焼土ブロック、炭化物を含んでおり、無構造なことから人為的に埋め戻されたものと考えられる。

遺物 出土遺物はなかった。

所見 第3、5、6号柱穴より小規模なものの、形状と配置から掘立柱建物の柱穴と考えられる。

第5号柱穴（P-5、第20図）

位置 2区東側、第4号柱穴と向かい合って検出された。

規模と平面形 残存長95×75cm程度の不整な楕円形を呈する。

断面形 底は平坦、壁は急角度で立ち上がる。確認面からの深さ55cm程度を測る。

覆土 ロームブロックを多量に含んでおり、無構造なことから人為的に埋め戻したのと考えられる。

遺物 出土遺物はなかった。

所見 形状と配置から掘立柱建物の柱穴と考えられる。

第6号柱穴（P-6、第20図）

位置 2区東側、第3号柱穴と向かい合って検出された。

規模と平面形 残存長130×70cm程度、隅丸方形を呈する。

断面形 底は平坦で、壁は東側がやや緩やかに立ち上がる。確認面からの深さ65cm程度を測る。

覆土 ロームブロックを多量に含んでおり、人為的に埋め戻したのと考えられる。覆土中位に黒土が帯状に認められたことから、埋め戻しに休止期間があったか、何らかの意図で黒土を選択的に埋め戻したと考えられる。

遺物 出土遺物はなかった。

所見 形状と配置から掘立柱建物の柱穴と考えられる。

第7号柱穴（P-7、第20図）

位置 2区東側、第6号柱穴の西で検出された。

規模と平面形 残存長40×20cm程度の半円形を呈する。

断面形 丸みを帯びた底部から急角度で立ち上がる。確認面からの深さ25cm程度を測る。

覆土 ロームブロックを多量に含んでおり、人為的に埋め戻したのか。

遺物 出土遺物はなかった。

所見 第1～6号柱穴よりも小規模な掘立柱建物跡の柱穴の可能性はある。

第8号柱穴 (P-8、第20図)

位置 2区東側、第3号柱穴と第6号柱穴の中間に認められた。

規模と平面形 長径35、短径25cm程度を測る楕円形を呈する。

断面形 確認面からの深さ25cm程度を測る。

遺物 出土遺物はなかった。

所見 第7、9号柱穴と同様に、掘立柱建物跡の柱穴の可能性はある。

第9号柱穴 (P-9、第20図)

位置 2区東側、第4号柱穴と第5号柱穴の中間に認められた。

規模と平面形 長径40cm、短径30cm程度の楕円形を呈する。

断面形 確認面からの深さ20cm程度を測る。

遺物 出土遺物はなかった。

所見 第7、8号柱穴と同様に、掘立柱建物跡の柱穴の可能性はある。

第5章 北西原遺跡（第8次調査）

第1節 調査の概要

北西原遺跡は常名地区新運動公園建設事業予定地であり、これまで試掘確認調査および7次に及ぶ発掘調査が行われている（第21図）。今回調査対象となった常名虫掛線では、事業予定範囲の大部分がすでに発掘調査されている。今次調査では、事業範囲のうち、発掘調査がされておらず、試掘確認調査で遺構が発見された幅9m、長さ約40mの範囲を発掘区として設定した（第22図）。表土除去は重機で行い、関東ローム層上面を遺構確認面とした。

第2節 発見された遺構と遺物

調査の結果、古墳時代前期の竪穴建物跡8軒、土坑2基、不明遺構1基、溝6条、ピット群1か所を検出した。なお、遺構番号はこれまでの調査から引き続いて連番とした。

第125号竪穴建物（SI-125、第23図）

位置 調査区北西隅で検出された。第16号溝に切られる。

主軸 N-32° -W

規模 一辺4m程度の方形を呈する。

壁 残りが悪く確認面からの深さは10cm程度である。幅10～20cm程度の周溝がめぐる。北隅の平面三角形の部分が一段高くなっている。

床 ほほ平坦である。

ピット 東の隅に残存長40×40cm程度の方形を呈するピット（P1）が検出されており、位置と形状から貯蔵穴と考えられる。柱穴は確認できなかった。

炉 遺構の中央に2か所検出された。炉1は60×30cm程度を測る不整な長楕円形を呈し、床面からの深さは10cm。炉2は残存長50cm程度、床面からの深さは10cmである。

覆土 確認面から床面までが浅いうえ、根の混入が多く堆積状況は不明瞭であった。

遺物（第24図、第12表） 1～3は土師器の鉢で、形態から古墳時代前期のものであろう。4、5は完形の土玉である。

所見 出土遺物および遺構の形態から、古墳時代前期の竪穴住居跡と考えられる。

第126号竪穴建物（SI-126、第25図）

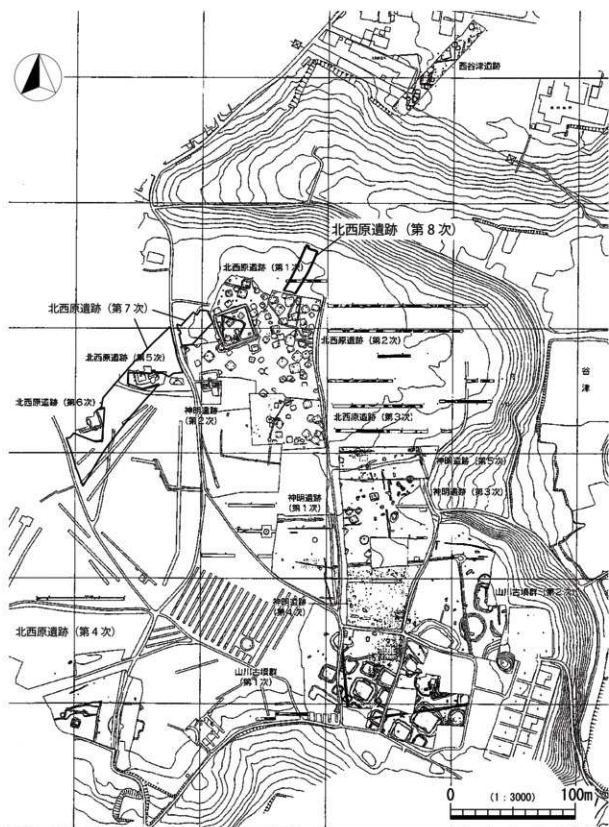
位置 調査区北東に位置し、北辺を第17号溝に、建物中央を第18号溝に切られる。また、第18号溝に平行して断続的に走る溝によっても攪乱されている。

主軸 N-12° -W

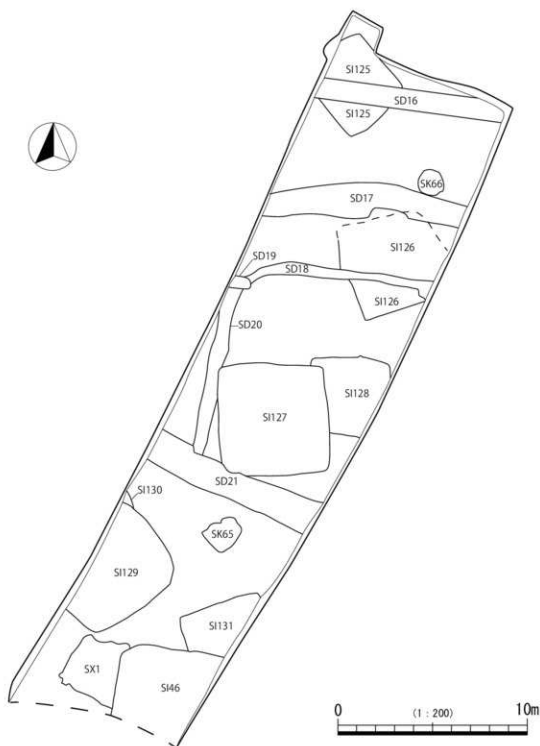
規模 一部が調査区外にかかっており、第17号溝による破壊で不明瞭であるが、1辺5m程度の方形を呈すると思われる。

壁 明瞭には捉えられず、緩やかに立ち上がると思われる。確認面からの深さ20cm程度を測る。

床 第17号溝に削られたためか、北に緩やかに傾斜する。周溝は認められなかった。

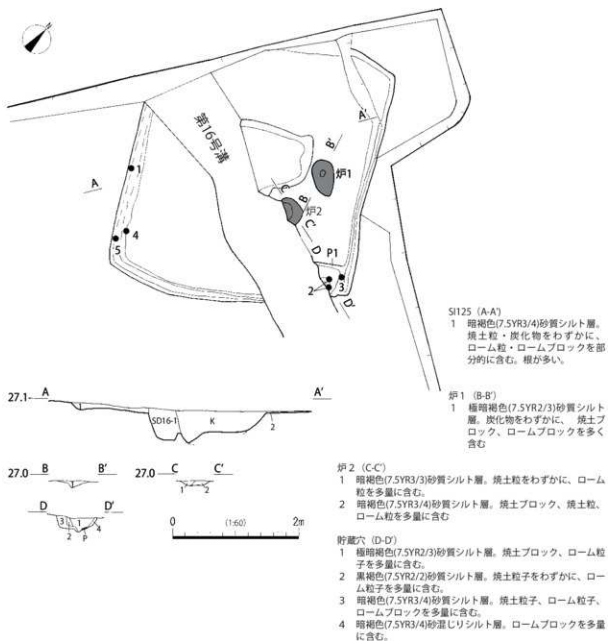


第 21 図 常名台遺跡群の調査区配置図 (山川古墳群第三次調査会編 2007 を一部改変)



第 22 図 北西原遺跡（第 8 次）調査区全体図

ピット P1は確認面からの深さ20cm程度、底面は直径10cm程度の円形である。P2は第18号溝によって掘方が壊されており、掘方上面のプランが不明確であるが、底面にやはり直径10cm程度の円形の硬化面を検出した。床面から底面までの深さは45cm程度である。P3はやはり直径10cm程度の底面をもち、底面から北東に広がるような不整な掘方をもつ。床面から底面までの深さは45cm程度である。これら3基のピットは、底面の形態および標高がほぼ一致しており、建物内の位置関係から



第23図 第125号竪穴建物

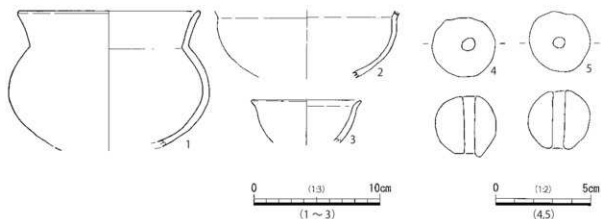
も主柱穴と考えられる。

炉 建物の北よりで検出された。長軸1m、短軸40cm～90cmの不整形を呈し、床面からの深さ5～10cm程度を測る。複数回の作り替えを行ったと思われる。

覆土 2層はいわゆる三角堆積を呈しており、自然に埋没したものと考えられる。

遺物(第26図、第13表) 1は建物西壁で出土した、大型の赤彩壺の口縁部。完形で、肩部以下に接合する破片は検出されなかったことから、住居廃絶後に口縁部のみが意図的に遺棄された可能性がある。2は鋸歯状の櫛描文が施される壺の肩部片。3は摩耗により図では表現できなかったが外面ハケ目調整の壺。4は高坏、5は台付甕でいずれも外面には縦ミガキが施される。

炭化材 本跡からは炭化材がまとまって見つかった。第25図6～11について樹種同定を行ったところ、すべてコナラ属コナラ節であった(第6章参照)。これらの炭化材は建物の中心から放射状に分



第24図 第125号竪穴建物出土遺物

第12表 第125号竪穴建物出土遺物観察表

掲載番号	種類 器種	法量	胎土	色調	焼成	器形の特徴	技法の特徴
1	土師器 鉢	A (15.0) C (11.2)	長石・石英多量	内面にぶい褐 外面にぶい赤褐、黒褐*	普通	体部は扁平な球状を呈する。頸部から直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	外面はヘラケズリ後ナデ。内面は体部で斜め、口縁部で横方向のヘラケズリ後、ナデ。
2	土師器 鉢	C (5.7)	長石・石英多量	内面：褐灰 外面：明褐	普通	鉢の体部破片。	内外面共にナデ。
3	土師器 鉢	A (9.0) C (3.8)	長石・石英中量	橙	普通	体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。	内外面共にヨコナデ。
4	土製品 土玉	長さ 31.1 幅 33.2 厚さ 30.2 重量 31.2g	長石・石英少量	にぶい褐	良好	孔径は約6mmで、いびつな球形を呈する。	ナデ。
5	土製品 土玉	A3.1 B3.2 C3.05 重量 32.7g	長石・石英少量	明赤褐	良好	孔径は約6mmで、球形を呈する。	多方向からのケズリ→ナデ。指頭圧痕も残る。
6	須恵器 環	A (13.0) C (3.8)	石英中量、雲母少量	灰色	普通	直線的に立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。	内外面とも回転ナデ。

布しているが、後述する第127号竪穴建物と比べて材の本数が少なく、顕著な焼土も認められない。
所見 出土遺物および遺構の形態から、古墳時代前期の竪穴住居跡と考えられる。

第127号竪穴建物 (SI-127、第27、28図)

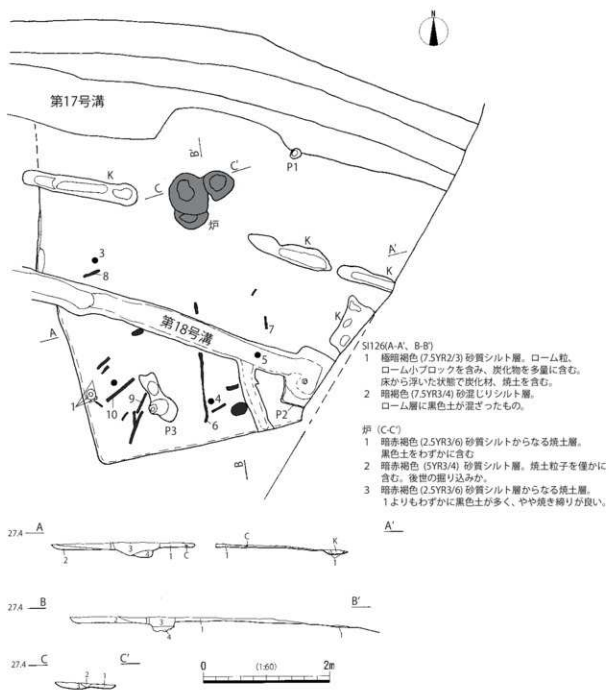
位置 調査区中央に位置する。北西隅で第20号溝と接し、南西隅を第21号溝によってわずかに切られる。

主軸 N-4° -W

規模 1辺5.9m程度の整った正方形を呈する。

壁 確認面からの深さ40cm程度を測り、急角度で立ち上がる。

床 平坦で、床面全体が明瞭に硬化している。南辺中央には入口施設に関連すると思われる溝が存在し、これと直交して間仕切りと思われる畝状の盛り上がり認められた。この盛り上がりに接続するように、西側には間仕切り溝が確認されている。さらに炉を囲むように東西の壁際の床が一段高く

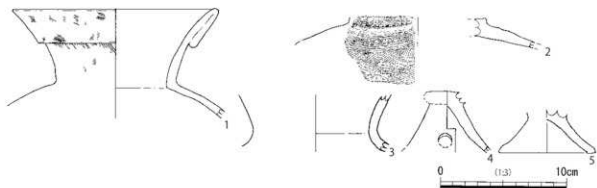


第25図 第126号竪穴建物

なっている。

ピット P1~P4は主柱穴で、底面の直径から、柱材は直径10~15cm程度と考えられる。P5は1m×80cm程度の長方形を呈し、貯蔵穴と考えられる。P6は複数のピットが複合しており、性格は不明だが建物内の位置から考えると貯蔵穴の可能性がある。P7~P11は性格不明の浅いピットだが、炉を囲むように検出されたことから、炉に関わる施設の可能性がある。

炉 建物北側中央で検出された。掘方は1×1m程度の不整形を呈し、掘方中央には硬く焼き締まった焼土が認められた。



第26図 第126号竪穴建物出土遺物

第13表 第126号竪穴建物出土遺物観察表

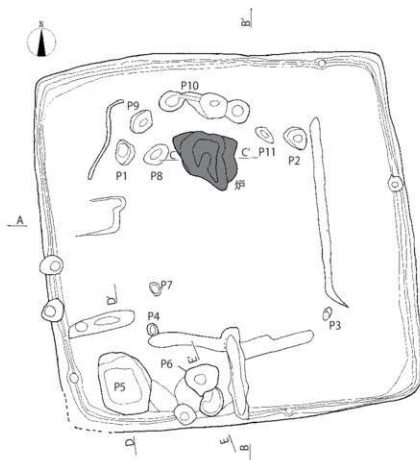
掲載番号	種類 器種	法量	胎土	色調	焼成	器形の特徴	技法の特徴
1	土師器 壺	A17.0 C (9.0)	長石・石英多量	明赤褐、赤黒	良好	頸部からゆるやかに外反しながら立ち上がる。折り返し口縁。	内面は丁寧なナデ。外面は頸部に縦方向、折り返し口縁部に横方向のハケ目後、丁寧なナデ。
2	土師器 壺	C (2.4)	長石・石英多量	にぶい橙	普通	壺の肩部片。	内面は劣化による剥落が著しく不明。外面は鋸歯状や同心円状の摺指文。肩部の段にキザミが施される。
3	土師器 壺	C (4.7)	長石・石英・雲母中量	内面：灰褐 外面：明赤褐、黒褐	普通	頸部でくびれ、口縁部が外反しながら立ち上がる。	内面ナデ。外面縦位のハケ目後、ナデ。
4	土師器 高杯	C (5.1)	長石・石英中量、雲母微量	橙、褐灰	普通	脚部はわずかに外反して開く。三か所穿孔。	内面はケズリ後ナデ。外面は劣化により不明瞭だが縦ミガキか。
5	土師器 台付鉢	B (8.0) C (3.4)	長石・石英中量、雲母微量	暗褐、にぶい黄褐	普通	脚部は直線的に大きく開く。接地する部分は平坦に整えられる。	内面ナデ。外面縦ミガキ。

覆土 本跡では、まず竪穴建物廃絶後、壁が崩れてローム層が三角形に堆積する（1層、2層）。その後、炭化材と焼土が堆積する。炭化材は建物中央では床と接して、一部は土壌化している一方（7層）、壁際では床から浮いており、三角堆積が起こったのち、窪地の状態で遺棄されたことがうかがえる。焼土は7層や炭化材と同じレベルかわずかに上位に認められ、ほぼ同時の堆積物と考えられる。炭化材、焼土の上位には、ロームブロックそのもの（4層）や、ローム粒を多量に含む堆積物（5層、8層）が堆積しており、炭化材が形成されたのち、人為的に埋め戻されていると考えられる。

遺物（第29図、第14表） 遺構自体の保存の良さや膨大な炭化物に比して、人工遺物の出土は多くない。1～9は土師器で、2～4は赤彩が施される。10は砥石で、実測図の上下端を除く4面が使用されている。11は完形の土玉である。

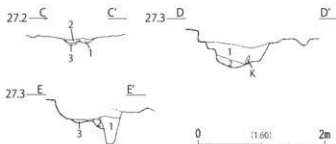
炭化材 本跡からは多量の炭化材が検出されている。位置を記録して取り上げたものだけで128点あり、建物中央を中心として放射状に分布している。ほとんどがみかん割の木材で、わずかに屋根材かと思われる炭化した草本も認められた。これらのうち、第28図12～24について樹種同定を行っており、いずれもコナラ属コナラ節であった。また、草本はイネ科であった（第6章参照）。

所見 出土遺物と遺構の形態から、古墳時代前期の竪穴住居跡と考えられる。また、覆土の堆積状況



SI127

- 1 褐色(7.5YR3/4)砂混じりシルト層。
ロームブロックを多量に含む。
壁際の三角堆積土。
- 2 褐色(10YR4/6)粘土質シルト層。
壁のローム層が崩れたもの。締りが弱い。
- 3 4と8の漸移層。
- 4 褐色(7.5YR4/6)砂混じり粘土質シルト層。
焼土粒、炭化物粒を中量、ロームブロックを多量に含む。埋め戻したロームブロックがあとで周りと混ざったもの。
上面が硬い。
- 5 暗赤褐色(5YR3/4)砂質シルト層。
焼土粒、
焼土ブロック、炭化粒、ローム粒を多量に含む。
焼土と埋め戻し土が混ざったもの。
- 6 褐色(7.5YR4/4)砂質シルト層。
ローム粒を多量に含む。住居埋め戻し後の自然堆積土。
- 7 黒褐色(7.5YR2/2)粘土質シルト層。炭化材が土壌化したもの。
- 8 暗褐色(7.5YR3/4)砂混じりシルト層。ローム粒を多量に、炭化物粒と焼土粒を少量含む。埋め戻し土。
- 9 暗赤褐(2.5YR3/6)焼土。



P6 (E-E')

- 1 暗褐色(7.5YR3/4)わずかに砂混じりシルト層。
ロームブロックを中量含む。締りやや弱く、埋め戻し土。
- 2 暗褐色 (10YR3/4) 粘土質シルト層。下部ほど色味が黄色くなり、ロームに近い。よく締まっており、裏込めの土か。

炉 (C-C')

- 1 暗褐色(10R3/6)砂混じりシルト層。
極めて硬く、焼き締まった焼土。
- 2 暗赤褐色(5YR3/4)砂質シルト層。
焼土粒を多量に含む。
締りがなく埋め戻し土か？
- 3 褐色(7.5YR4/4)砂混じりシルト層。
非常に硬く締まったロームブロック。

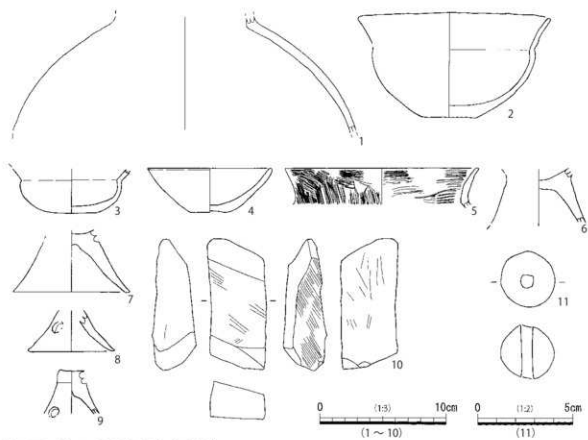
P5 (D-D')

- 1 暗褐色(7.5YR3/3)砂質シルト層。
ローム粒、ローム小・大ブロックを中量、炭化物をわずかに含む。埋め戻し土。
- 2 暗褐色(10YR3/4)砂混じり粘土質シルト層。
φ 3cmまでのロームブロックを多量に含むローム層による埋め戻し土。

第27図 第127号竪穴建物



第28图 第127号竖穴建物遺物出土状況



第29图 第127号竖穴建物出土遺物

第14表 第127号竪穴建物出土遺物観察表

掲載 番号	種類 器種	法量	胎土	色調	焼成	器形の特徴	技法の特徴
1	土師器 壺	C (9.5)	粗粒な長石・石 英・チャート中 量	にぶい黄褐、に ぶい黄橙	普通	壺の体部片。	内面は頸部付近ヘラケズリ、そ の他ナデ。外面は摩耗によって 不明。
2	土師器 鉢	A [15.3] B4.5 C8.7	長石・石英多量、 粗粒なチャート 少量	内面赤褐 にぶい赤褐 外面赤褐	普通	平底から丸みを帯びて立ち上 がり、口縁部で外反する。	内面はミガキ。外面は底部へ割 下部にかけてヘラケズリ、その 他ミガキ。内面の上半から外面 全体にかけて赤彩。
3	土師器 埴	B3.0 C (3.7)	長石、石英、 チャート中量	赤	普通	平底に近い丸底をもち、体 部は扁平な球状を呈する。 口縁部で外反する。	内面ミガキ。外面は底部ヘラケ ズリ、体部ミガキ。口縁部はハ ケメ後ミガキ。内面口縁部から 外面にかけて赤彩。
4	土師器 鉢	A10.3 B3.3 C3.6	長石・石英中量	赤褐	普通	わずかに上げ底状を呈する 底部から、緩やかに立ちあ がる。	内面ナデ。外面底部から胴下半 部までヘラケズリ、体部上半へ 口縁部までミガキ。全面に赤彩。
5	土師器 甕	A [16.0] C (3.0)	長石、石英中量	にぶい黄褐、黒 褐	普通	甕の口縁部片。	内面口縁部ハケメ、頸部以下ナ デ。外面ハケメ。
6	土師器 台付甕	C (4.6)	長石多量	橙	普通	直線的に開く脚部。	内面はハケメ。外面はハケメ後 ナデ。
7	土師器 台付甕	B [9.7] C (5.1)	長石中量	にぶい黄褐、黒 褐	普通	直線的に開く脚部。	甕の内面底部はヘラナデ。脚の 内面は上半ヘラケズリ。下半ナ デ。外面はハケメ後ナデ。
8	土師器 高坏	B [6.9] C (3.4)	長石少量	にぶい黄橙	普通	直線的に開く脚部。穿孔あ り。	内面ヘラケズリ後ナデ。外面ミ ガキ。
9	土師器 高坏	C (3.5)	長石少量	赤褐	普通	やや外反して開く脚部。穿 孔あり。	坏部内面および脚外面はミガ キ、赤彩。脚内面は未調整で、 串状の工具を突き刺した痕が残 る。
10	石製品 砥石	A6.9 B2.9 C1.9 重量 58.5g	—	にぶい黄	—	泥岩製の砥石。砥面は4面 確認できる。左側面が特に 滑らかである。	
11	土製品 土玉	A2.9 B2.85 C2.85 重量 19.8g	微細な長石多量 微細な石英、雲 母微量	にぶい橙	普通	孔径は約7mmで、球形を 呈する。	ナデ。

と炭化材の出土状況から、本跡で多量に検出された炭化材は竪穴建物の建材が原位置で燃えたというよりは、建物内がある程度埋まったのちに、遺棄された木材などの燃焼が行われたと解釈できる。

第128号竪穴建物 (SI-128、第30図)

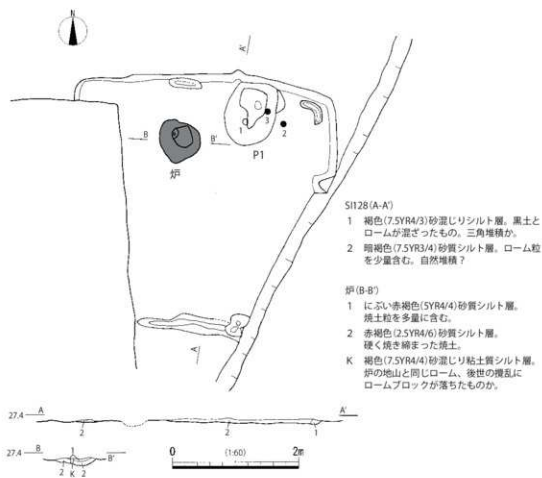
位置 調査区中央東よりで検出された。西側を第127号竪穴建物に切られる。

主軸 N-2' -E

規模 1辺4m程度の方形を呈する。

壁 確認面からの深さ10cm程度を測り、丸みを帯びて立ち上がる。

床 平坦である。幅10～20cm程度の周溝が部分的に認められた。



第30図 第128号竪穴建物



第31図 第128号竪穴建物出土遺物

第15表 第128号竪穴建物出土遺物観察表

掲載番号	種類 器種	法量	胎土	色調	焼成	器形の特徴	技法の特徴
1	土師器 壺か	B5.7 C (2.0)	長石・石英多量	内面赤褐 外面にぶい赤 褐、灰褐	普通 平底		内面は多方向からのヘラナデ、 外面多方向からのヘラケズリ、 一部ヘラナデ。

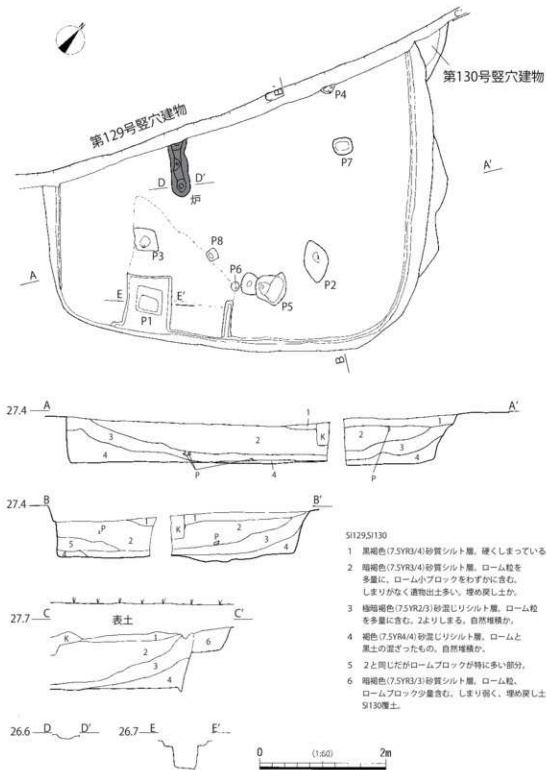
ピット 支柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。P1、P2は性格不明である。

炉 建物北よりで検出された。直径70cm程度の不整形円形を呈し、床面からの深さは10cm程度を測る。

覆土 掘り込みが浅く、遺構検出段階で床面が露出しており覆土はわずかに認められたにすぎない。壁際に三角堆積と思われる堆積物が認められることから（1層）、自然に埋没したものか。

遺物（第31図、第15表） 土師器を中心とした遺物が出土した。1は壺の底部である。第30図2、3（PL25）は炭化モモ核である。

所見 出土遺物と切り合い関係、遺構の形態から、古墳時代前期の竪穴住居跡であると考えられる。



第32図 第129, 130号竪穴建物

第129、130号竪穴建物 (SI-129、130、第32、33図)

位置 第129号竪穴建物は調査区南側、西よりで全体の2/3程度が検出された。わずかに検出された第130号竪穴建物を切って構築されている。

主軸 N-30° -W

規模 現存する部分から、一辺5.5m程度の方角を呈すると考えられる。

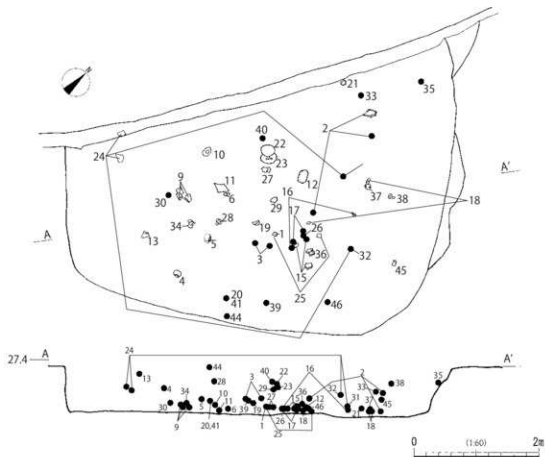
壁 確認面からの深さ60~70cm程度を測る。3辺のうち、南の2辺ではほぼ垂直に、北壁は急角度で立ち上がる。幅10cm、深さ10cm程度の壁溝が巡るが、南隅では途切れる。

床 ほぼ平坦である。後述する貯蔵穴、支柱穴、間仕切り溝の端を結んだ不整形三角形の範囲に硬化面が認められた。

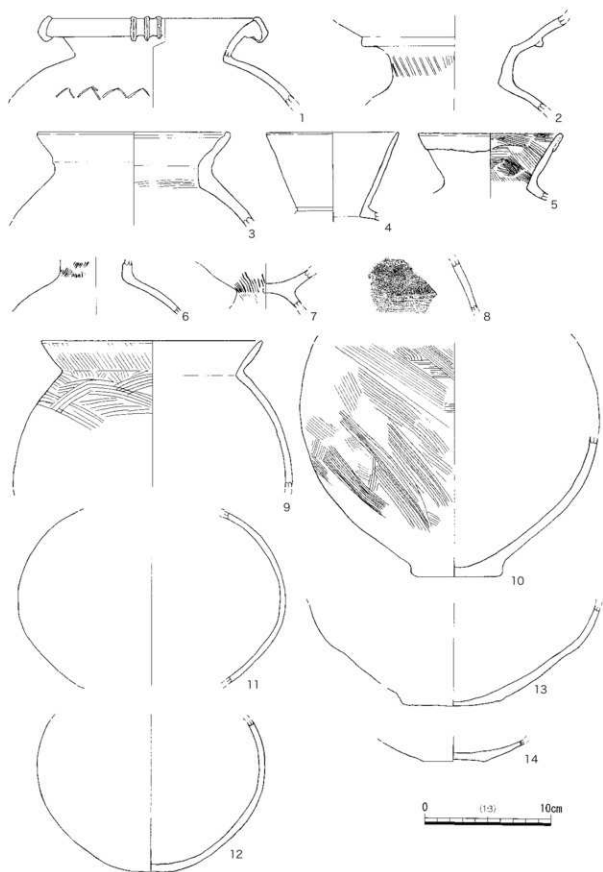
ピット 8か所検出された。P1は貯蔵穴で、上面は60×80cmの長方形を呈し、5cm程度掘りこまれている。底面は40×40cm程度の正方形を呈し、さらに30cm程度掘りこまれている。上面の凹みは落とし蓋の受けと考えられる。P2、3、4、6は支柱穴であり、この配置から5本または6本柱の構成と考えられる。P5、7、8は性格不明の浅い掘り込みである。また、南東辺の周溝に接続して、間仕切り溝が掘りこまれている。

炉 建物中央やや西よりに、溝状の長楕円形を呈する炉跡が検出されている。

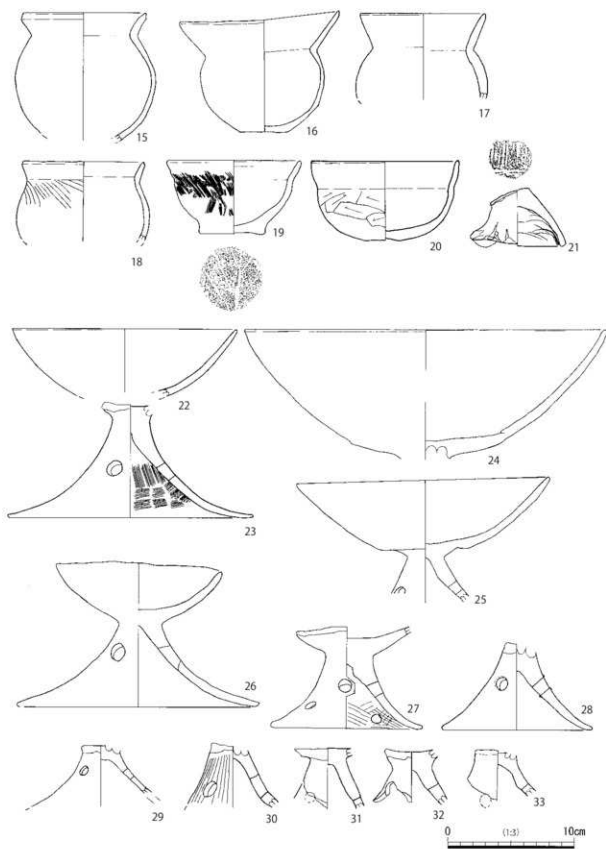
覆土 下に凸のレンズ状の堆積構造を示している。4層、3層は壁および建物外部からロームが崩落、



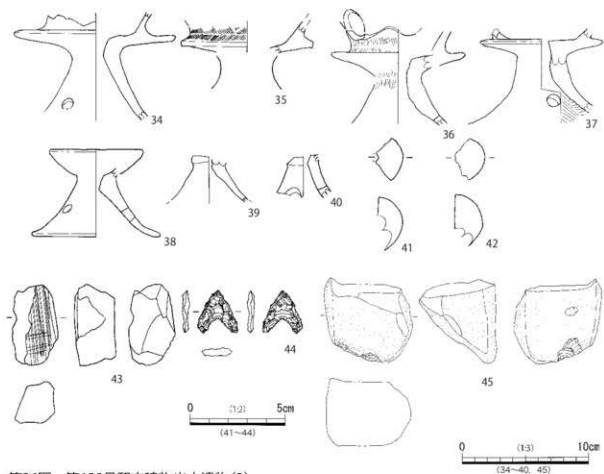
第33図 第129号竪穴建物遺物出土状況



第34圖 第129号竪穴建物出土遺物(1)



第35図 第129号竪穴建物出土遺物(2)



第36図 第129号竪穴建物出土遺物(3)

第16表 第129号竪穴建物出土遺物観察表(1)

掲載番号	種類 器種	法量	胎土	色調	焼成	器形の特徴	技法の特徴
1	土師器 壺	A (17.2) C (7.4)	粗粒な長石、石 英多量	内面にぶい黄橙 外面橙	不良	頸部から大きく外反して立 ち上がり、口縁部は折り返 して肥厚する。	内面は無調整で、粘土の繋ぎ目 を残す。体部及び頸部外面にハ ケメ。体部に縦條状の刻文、口 縁部に棒状浮文。
2	土師器 壺	C (7.8)	長石・石英・雲 母多量	橙	普通	頸部に向かって内湾した体 部が、頸部でくびれ僅かに 外反した後、口縁部に向 かって大きく外反する。頸 部外面に一条の突帯を有す る。	体部内面は無調整で、頸部、口 縁部はミガキ。外面はハケメ後 ミガキ。
3	土師器 壺	A (15.7) C (7.7)	長石・雲母多量、 石英少量	内面明赤褐 外面橙	普通	肥厚する頸部から外反気味 に立ち上がり、口縁部でわ ずかに内湾する。	内外縁ともにハケメ後、体部は 粗いヘラナデ、頸部以上はヨコ ナデ。
4	土師器 壺	A11.0 C (7.3)	石英、長石中量、 赤色粒子少量	内面にぶい黄 橙、灰オリ ブ、外面橙	良好	直線的に立ち上がる口縁 部。頸部との境目に沈線を 施す。	内外面ともにハケメ後ナデ。

第17表 第129号竪穴建物出土遺物観察表(2)

掲載番号	種類 器種	法量	胎土	色調	焼成	器形の特徴	技法の特徴
5	土師器 壺	A (12.0) C (5.5)	長石中量、雲母 少量	内面橙 外面明赤褐	普通	頸部から直線的に立ち上がる。折り返し口縁。	内面体部は未調整、口縁部はハケメ。外面はハケメ後縦ミガキ、折り返し部分にナデ。
6	土師器 壺	C (4.7)	長石少量、雲母 微量	にぶい黄橙	普通	壺の頸部片。	内面体部は未調整、頸部にナデ。外面はハケメ後ミガキ。
7	土師器 台付甕	C (3.8)	長石多量	赤褐	普通	台付甕の底部破片。	底部内面ヘラナデ、脚部外面ハケメ。
8	土師器 壺	C (4.4)	長石多量、玉髄 (チャート?)少量	にぶい赤褐	普通	壺の体部片。	内面ナデ、外面に歯状の櫛描文。
9	土師器 壺	A (18.3) C (12.1)	長石多量、雲母 微量	内面にぶい赤褐 外面黒褐	普通	体部は丸みを帯びて立ち上がり、頸部ですぼまったのち直線的に開く。	体部内面ヘラナデ。外面ハケメ、口縁部内面から外面の中ほどにかけて、ハケメ後ナデ。
10	土師器 壺	B7.0 C (19.3)	長石・石英・雲 母少量	内面明赤褐 外面明赤褐、に ぶい橙	普通	平底の底部から大きく開いて立ち上がり、球状を呈する。	内面はハケメ後ヘラナデ。外面はハケメ後、体部下半にヘラケズリ。
11	土師器 壺	C (14.5)	長石多量、石英 少量	にぶい橙	普通	球状の胴部片。	内面ナデ、外面は劣化により不明瞭だがハケメ後ナデか。
12	土師器 壺	B3.6 C (12.6)	長石・石英多量、 粗粒なチャート、 赤色粒子(スコ リア?)少量	にぶい橙	普通	平底から丸みを帯びて立ち上がり、球状を呈する。	内面ナデ。外面ハケメ後底部をヘラケズリ。内面には米粒大の黒色付着物多数、炊飯の痕跡か。外面スス付着。
13	土師器 壺	B8.0 C (8.3)	長石・石英多量	にぶい黄橙	普通	平底の底部から大きく開く。	内面ナデ、外面ハケメ。内面に炭化物付着、外面にスス付着。
14	土師器 壺	B (5.0) C (2.1)	長石多量、雲母 微量	にぶい赤褐	普通	わずかに上げ底状を呈する底部から、大きく開いて直線的に立ち上がる。	内面ナデ、外面ヘラケズリ。
15	土師器 壺	A10.3 C (10.5)	長石中量、雲母 少量	内面明赤褐 外面にぶい赤褐	普通	体部は球状を呈し、口縁部は外反し、「く」の字状に折れる。	内面体部ミガキ、口縁部ナデ。外面はハケメ後ナデ。
16	土師器 鉢	A13.2 B4.0 C9.2	長石、チャート 少量、細粒～粗 粒砂サイズの赤 色粒子中量	にぶい橙	普通	底部は平底、体部は球状を呈する。口縁部は頸部から外反する。	内面ミガキ、外面ナデ。底部はヘラケズリ。
17	土師器 埴	A (10.4) C (7.1)	長石・玉髄 (チャート?)少 量	にぶい橙	普通	体部は球状を呈し、口縁部は外反して直線的に立ち上がる。	内面体部は無調整、口縁部ナデ。外面はハケメ後ナデ。
18	土師器 鉢	A (10.0) C (6.5)	長石少量	内面にぶい黄橙 外面灰黄褐、褐 灰	普通	体部は球状を呈し、口縁部は外反して直線的に立ち上がる。	内面体部ヘラナデ、口縁部ナデ。外面はハケメ後、口縁部にナデ。
19	土師器 鉢	A10.9 B5.5 C6.1	長石・石英・ チャート・赤色 粒子多量	橙	普通	底部は平底。体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部で外反する。	内面体部ヘラナデ、口縁部ナデ。外面はハケメ後、口縁部にナデ。底部木炭痕。
20	土師器 埴	A12.2 B2.7 C6.5	長石多量、チャ ート、雲母少量	橙	普通	底部は中央がわずかに凹み、上げ底状を呈する。体部は扁平な球状で、頸部でくびれ、丸みを帯びて立ち上がる。	内面ナデ、体部は剥落が著しい。外面底部から頸部までヘラケズリ、口縁部ナデ。

第18表 第129号竪穴建物出土遺物観察表(3)

掲載番号	種類 器種	法量	胎土	色調	焼成	器形の特徴	技法の特徴
21	土師器 脚	B7.7 C (4.7)	長石・石英中量	内面にぶい黄 橙、黒 外面明赤褐、灰 黄褐*	不良	脚部(または口縁部)の片 側が押しつぶされ、内側に 折り曲げられている。	外面は無調整で部分的にナデ。 内面雑なハケメ。上面(または 底部)はヘラナデ。
22	土師器 高坏	A [18.6] C (5.5)	長石・石英・ チャート多量、 赤色粒子少量	にぶい橙	普通	高坏の坏部。中央を円形に 欠損しており、意図的な加 工か。	内面ハケメ後縦ミガキ。外面横 ハケメ後縦ミガキ。
23	土師器 高坏	B20.4 C (9.4)	長石・石英・ チャート多量、 赤色粒子少量	にぶい橙	普通	裾を大きく「ハ」字に開く 脚部。3箇所穿孔。	内面はハケメ後、裾部のみ同心 円状の横ナデ。外面はハケメ後 縦ミガキ。
24	土師器 高坏	A [30.0] C (10.7)	長石・石英・ チャート細碎微 量。精選された 印象を受ける。	にぶい黄橙	良好	外反して大きく開く坏部。 弱い稜をもち、稜からは 丸みを帯びて立ち上がる。	内外面ともに縦のミガキ。
25	土師器 高坏	A [20.8] C (10.1)	長石・チャート 多量、石英、雲 母微量	明黄褐	普通	脚部から外反して大きく開 いた後、稜をもち、丸みを 帯びて立ち上がる。脚部に 4箇所の穿孔。	坏の内面はナデ、外面は縦位の ミガキ。脚は外面縦位のミガキ、 内面横位のミガキ。
26	土師器 高坏	A13.6 B [19.7] C11.9	長石、石英少量	にぶい橙	普通	脚部は「ハ」字にひらき、 三か所穿孔する。坏部は弱 い稜をもち、丸みを帯びて 立ち上がる。	脚の内面は裾部のみ同心円状の ナデ。その他は未調整で、穿孔 部を焼成後に打ち削いで整え ている。脚部外面縦位ミガキ。坏 部内外面ミガキ。
27	土師器 高坏	B [12.4] C (8.4)	長石・石英多量、 雲母微量	にぶい赤褐	良好	脚部は「ハ」字にひらき、 上段4箇所、下段4箇所の 穿孔。脚部中央に器台と同 様の穿孔をもつ。	脚部内面ハケメ、裾部のみ同 心円状のナデ。接地部分を幅 4mm程度面取り。脚部外面及 び坏部内外面ミガキ。
28	土師器 高坏	B12.4 C (7.1)	長石、石英、 チャート多量	にぶい橙	普通	「ハ」字にひらく脚部。3 箇所穿孔。	内面下部に同心円状のナデ、外 面上部ミガキ、裾部同心円状の ナデ。
29	土師器 高坏	C (5.0)	長石・石英多量、 雲母微量	内面にぶい橙 外面赤	普通	「ハ」字に大きくひらく脚 部。3箇所穿孔。	脚部内面下部に同心円状のナ デ。脚部外面および坏部にミガ キ、赤彩。
30	土師器 高坏	C (5.0)	長石多量、チャ ート、雲母少量	橙	普通	脚部片。3箇所穿孔。	外面縦位のミガキ、内面は部分的 にナデ。
31	土師器 高坏	C (5.1)	長石多量、チャ ート、雲母少量	にぶい赤褐	普通	脚部片。3箇所穿孔。	外面縦位ミガキ、内面同心円状 のナデ。
32	土師器 高坏	C (4.2)	長石・石英多量、 チャート、雲母 少量	橙	普通	脚部片。3箇所穿孔。	外面見ミガキ、内面未調整で、 二次焼成による付着物が認めら れる。
33	土師器 高坏	C (4.1)	長石・石英多量	橙	普通	脚部片。3箇所穿孔。	外面縦位ミガキ、内面ハケメ後 ナデ。

第19表 第129号竪穴建物出土遺物観察表(4)

掲載 番号	種類 器種	法量	胎土	色調	焼成	器形の特徴	技法の特徴
34	土師器 器台	C (8.8)	長石・石英多量	橙	普通	裝飾器台。水平に広がった張り出し部から受部が外反して立ち上がる。張り出し部の端部は丸い。脚部は直線的に開き、3箇所穿孔。	脚部は段位のミガキ。それ以外は劣化しており不明瞭。
35	土師器 器台	C (2.6)	長石・チャート・雲母微量。精選された印象を受ける。	橙	良好	裝飾器台。張り出し部は端部に角ばった稜をもつ。	受部内面ミガキ。張り出し部下面はミガキ、端部はナデ。受部外面はハケム後ミガキ。
36	土師器 器台	C (7.6)	長石、石英、チャート細碎中量。	橙	普通	裝飾器台。張り出し部から受部が外反して立ち上がる。張り出し部の端部は丸い。受部は欠損しているが3～4箇所の穿孔が認められる。脚部に3箇所穿孔。	受部内面ナデ。外面はハケム後ナデ。
37	土師器 器台	C (6.9)	長石、赤色粒子多量、玉髄(チャート?)中量	橙	普通	裝飾器台。張り出し部の端部は角ばった稜をもつ。受部にはやや大きな穿孔。脚部は「ハ」の字に開き、3箇所穿孔。	受部はナデ、脚部外面は段位のミガキ。脚部内面はハケム後、裾部のみ同心円状のナデ。
38	土師器 器台	A [7.6] B10.7 C7.2	長石多量、雲母微量	内面にぶい橙 外面赤	普通	受部は丸みを帯びて立ち上がる。脚部は直線的に開き、接地面でやや強く屈曲する。脚部3箇所穿孔。	受部内外面、脚部はミガキ後赤彩。脚部内面は同心円状のナデ、設置部分に粘土をナデつけてわずかに厚くしている。
39	土師器 器台	C (3.8)	長石多量、石英・雲母中量	橙	普通	器台の裾部片。実測図には表現されていないが、穿孔の痕跡から恐らく3箇所穿孔されていたと考えられる。	裾部内面ハケ目。外面ミガキ。
40	土師器 器台	C (3.4)	長石・石英多量	にぶい黄橙	普通	器台の裾部片。3箇所穿孔。	内面未調整、外面段位ミガキ。
41	土製品 土玉	A (1.29) B (2.2) C (2.8) 重量 5.6g	長石微量	内面灰褐 外面黒褐	普通	土玉破片。孔径は4～5mm。	ナデ。黒色処理か。
42	土製品 土玉	A1.05 B2.28 C2.75 重量 8.9g	長石微量	にぶい黄橙	普通	土鉢破片	ナデ。
43	石製品 碓石	A4.2 B2.1 C2.1 重量 14.1g	筑波山塊でみられる熱変成した泥岩か。	灰黄		碓面は3面確認できる。側面と裏面には光沢が認められる。表面は長軸方向とそれに直行する線状痕が認められる。	
44	石器 石鏃	A2.21 B1.5 C2.5 重量 1.2g	チャート	青灰		凹基無茎鏃。正面図左上に打点が認められ、押圧剥離で整形されている。	
45	石器 叩き石	A6.9 B7.0 C5.4 重量 372g	花崗岩? 被熱のためか赤変している。	灰黄		敲石の破片と思われる。先端や、実測図裏面の平坦面に敲打痕が認められる。	

流入して堆積したと考えられる。一方で主たる遺物包含層である2層は、遺物を多量に含んでおり、しまりがなくローム粒、ロームブロックを含んでいることから、人為的な埋め戻し土であると考えられる。

遺物 (第34～36図、第16～19表) 土師器を中心とした遺物が出土しており、とくに高坏、器台が集中して出土している。1～14は壺、甕でハケ目調整のものが多く、15～20は小型の甕や鉢。21は特異な焼成不良の土器で、内面の調整が難いため脚と思われるが、焼成以前に片側が押しつぶされている。また、上部平坦面には直交するミガキが認められる。22～33は高坏である。外面は縦ミガキ、脚の内面にはハケ目が施されるものが多い。脚の透かし穴は多くは3か所だが、27では8か所穿孔されるほか、脚部内面に器台のような穴を途中まで開けた痕跡が認められる。22、23は隣接して出土し同一個体と考えられるもの、坏の中心部が打ち欠かれており接合しない。意図的な欠損の可能性があろう。34～40は器台である。とくに34～35は張り出しと透かし穴をもつ装飾器台であり、神明遺跡第3次調査で類例が出土している。41,42は土玉、43は筑波山塊の変成岩を使用した砥石である。44,45は縄文時代の石鏃と箆石である。第33図46 (PL25) は炭化モモ核である。

所見 第129号堅穴建物は、出土遺物から古墳時代前期の堅穴住居跡と考えられる。高坏、器台が多量に出土していることと、覆土の層相から、堅穴住居がある程度埋まったのち、祭祀的な高坏、器台の使用、廃棄が行われたと考えられる。第130号堅穴建物は第129号堅穴建物より古い住居跡と考えられるが、詳細な時期については不明である。

第131号堅穴建物 (SI131、第37図)

位置 調査区南側で半分程度が検出された。第46号堅穴建物を切って構築されている。

主軸 N-17° -W

規模 残存した辺から考えると、一辺4m程度の方角を呈すると考えられる。

壁 確認面からの深さ20～40cm程度を測り、急角度で立ち上がる。

床 北から南にわずかに傾く貼り床である。関東ローム8割、黒土2割程度で構成されており、厚さ6cm程度を測る。北辺に幅20～30程度の浅い周溝が認められた。

ピット 2か所検出されている。P1は主柱穴と考えられる。P2は床面上でプランを捉えられず、第46号堅穴建物の床面で確認された。SI46の主柱穴としては、位置が端に寄りすぎているため、第131号堅穴建物に伴うと解釈した。

炉 建物中央に、隅丸方形を呈する地床炉が検出されている。40cm×60cm程度で、覆土には顕著な焼土が認められたものの(3層)、炉床面はあまり赤変硬化していない。

覆土 根による擾乱が著しく不明瞭だが、壁際に三角堆積と思われる堆積物が認められることから、自然に埋没したものか。

遺物 (第38図、第20表) 土師器を中心とした遺物が出土した。2は極めて厚手で棒状浮文の貼り付けが認められる壺の口縁部であり、大廓式と考えられる。胎土も他の土器と異なり、赤褐色の砂礫を多く含んでいることから、搬入品と考えられる。

所見 出土遺物と遺構の形態から、古墳時代前期の住居跡と考えられる。

SI131 (A-A', B-B')

- 1 暗褐色(7.5YR2/3)砂質シルト層。根の痕跡が著しい。ローム粒を少量、焼土粒をわずかに含む。
- 2 暗褐色(7.5YR3/4)わずかに砂混じり粘土質シルト層。ロームと黒土が混ざったもので、三角雫様。
- 3 暗赤褐色(2.5YR3/3)砂質シルト層。黒土混じりの焼土。
- 4 2と同じで伊の盛り方か。
- 5 暗褐色(7.5YR3/4)砂質シルト。1よりも僅かにローム、焼土が多い。
- 6 褐色(7.5YR4/6)砂混じり粘土質シルト層。ローム混。黒土が2割程度の粘り状。

S140 (B-B')

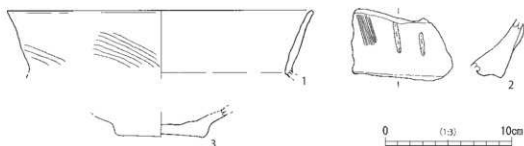
- 表土 黒褐色(7.5YR2/2)砂質シルトからなる土壌。植物の根が密集。
- 1 黒褐色(7.5YR3/2)砂混じりシルト層。ローム粒、ローム小ブロックを多量に含む。ローム大ブロックをわずかに含む。
 - K 1と内容は同じだが、より泥状が著しく、しまりも強い。
 - 2 褐色(7.5YR4/6)砂混じりシルト層。ロームと黒土が半々程度混ざったもの。
 - 3 黒褐色(7.5YR3/2)砂質シルト層。ローム粒、ローム小・中ブロックを多量に含む。部分的にφ300ほどのロームブロックが集中して多量に含まれる。
 - 4 褐色(7.5YR4/6)砂混じり粘土質シルト層。ロームが主体で黒土が2割程度混ざったもの。
 - 5 黒褐色(7.5YR3/1)砂混じりシルト層。ローム粒を多量に含む。黒土が主体でロームが2割程度混ざったもの。
 - 6 暗褐色(7.5YR3/3)砂混じり粘土質シルト層。硬く締まった粘り状。

SX1 (E-E')

- 1 暗褐色(7.5YR3/3)砂質シルト層。ローム粒を多量に含む。黒土に部分的に地山ロームが混ざったもの。
- 2 暗褐色(7.5YR3/3)砂質シルト。ローム小ブロックを中量含む。1よりもロームの混じりが少ない。
- 3 ローム粒を中量含む暗褐色(7.5YR2/3)砂質シルト層。部分的に地山ロームと混ざる。黒土に部分的に地山ロームが混ざったもの。



第37図 第131, 46号竪穴建物, 第1号不明遺構



第38図 第131号竪穴建物出土遺物

第20表 第131号竪穴建物出土遺物観察表

掲載番号	種類 器種	法量	胎土	色調	焼成	器形の特徴	技法の特徴
1	土師器 甕	B (25.2) C (5.6)	長石、石英少量	内面にぶい褐色 外面黒褐色、に ぶい褐色	普通	外反する甕の口縁部。	内面ナデ。外面ハケメ後ナデ。
2	土師器 壺	C (4.9)	長石、赤褐色の 極細粒砂～細礫 多量	淡黄橙	普通	厚手の口縁部。大衆式。	内ナデ。外面ハケメ後ナデ、棒 状浮文の貼り付け。
3	土師器 壺	B8.3 C (2.5)	長石多量	にぶい褐	普通	平底の底部。	内面は劣化により不明。外面底 部はミガキ、体部はナデ。

第46号竪穴建物 (SI46、第37図)

位置 調査区南端で2/3程度が検出された。北西原遺跡第2次調査で一部が発掘されている。第1号不明遺跡を切り、第131号竪穴建物に覆土を切られている。

主軸 N-8°-E

規模 残存部分から、1辺5～6m程度の方形を呈すると考えられる。

壁 確認面からの深さ70cm程度を測り、急角度で立ち上がる。

床 平坦で硬くしまった貼床である。西辺に周溝が認められたが、部分的である。北辺でもP1の西に隣接して、周溝の可能性ある落ち込みが認められた。

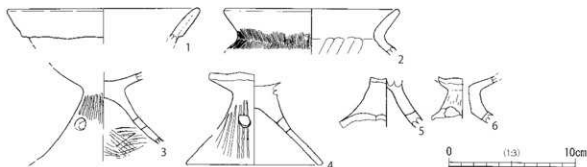
ピット 3か所検出された。P1は隣接した2つの掘りこみからなり、性格は不明である。P2、P3は建物内の位置、規模と形態から支柱穴と考えられる。

炉 4か所確認された。炉1は1×1.5m程度の不整形を呈する。炉2は中央で不整な瓢型を呈し、短軸0.5m、長軸1.7m程度を測る。炉3、4は直径25～30cm程度の円形を呈する。いずれも掘り込み中の焼土は明瞭に認められるものの、床面の赤変硬化は弱く、地床炉として繰り返し利用されたとは考えにくい。

覆土 貼床を含めて6層に分層された。いずれもロームブロックを多く含み、3層中にはロームブロックが集中する部分も認められた。5層、4層は自然堆積の可能性も残るが、1～3層は人為的に埋め戻したものと考えられる。

遺物 (第39図、第21表) 土師器を中心とする遺物が出土した。1は壺の折り返し口縁、2は外面ハケ目調整の甕。3～5は高坏、6は器台である。第37図7～10 (PL25) は炭化モモ核である。

所見 出土遺物と遺構の形態、切り合い関係から、古墳時代前期の住居跡と考えられる。モモ核と高



第39図 第46号竪穴建物出土遺物

第21表 第46号竪穴建物出土遺物観察表

掲載番号	種類 器種	法量	胎土	色調	焼成	器形の特徴	技法の特徴
1	土師器 壺	A [16.0] C (2.9)	長石多量、石英 少量	内面にぶい橙 外面橙	普通	折り返し口縁。	内外面ともにハケメ後ナデ。
2	土師器 甕	A [14.2] C (3.8)	長石、石英中量	内面赤褐 外面にぶい橙	普通	甕の口縁部片。	内面口縁部は横位のハケメ後ミガキ。頸部には指によるオサエ痕が残る。外面頸部は縦位のハケメ。口縁部はナデ。
3	土師器 高坏	C (7.7)	長石、石英少量	明赤褐、黒褐	普通	脚部はわずかに外反して開く。三か所穿孔。坏部は丸みを帯びて立ち上がる。	坏部内面および外面はミガキ。脚部内面は穿孔より上がナデ、下がハケメ。
4	土師器 高坏	B [11.3] C (7.4)	長石、チャート 少量	内面にぶい黄橙 外面明赤褐、に ぶい黄橙	普通	脚部は直線的に大きく開く。3箇所に穿孔。	坏部内面は二次焼成のためか黒色を呈し、剥落がみられる。脚部外面はミガキ、内面はナデ。
5	土師器 高坏	C (4.0)	長石、石英中量	明赤褐	不良	外反して開く脚部破片。3箇所に穿孔。	内面ナデ、外面ミガキ。
6	土師器 器台	C (3.1)	長石・石英少量	にぶい黄橙	普通	裾は外反して大きく開く。	受け部はナデ。裾部外面はハケメ、内面はナデ。

坏が比較的多く出土していることから、住居廃絶に伴って、またはある程度住居が埋没したのちに、祭祀が行われたと考えられる。

第1号不明遺構 (SX-1、第37図)

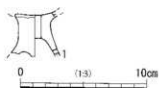
位置 調査区南端位置し、第46号竪穴建物に切られる。

規模と平面形 3×3m程度の不整な方形を呈し、複数の浅いピットを伴う。

断面形 確認面からの深さ5～15cm程度を測り、遺構の立ち上がりは不明瞭で底面も凸凹している。

遺物 (第40図、第22表) 土師器を中心とする遺物が出土した。図示したものは赤彩された器台の

第22表 第1号不明遺構出土遺物観察表



第40図 第1号不明遺構
出土遺物

掲載番号	種類 器種	法量	胎土	色調	焼成	器形の特徴	技法の特徴
1	土師器 器台	B (3.5)	石英、長石 少量	赤褐	普通	受けは平坦で中央に穿孔。裾部は直線的に開き、3箇所に穿孔。	受け部内面はミガキ、赤彩。裾部外面は上部が横、下部が縦のミガキ、赤彩。裾部内面は未調整。

破片である。

所見 遺構確認当初は竪穴建物と考えていたが、床面や炉は認められないことから不明遺構とした。出土遺物は古墳時代前期のものであるが、遺構の時期、用途は不明であり、攪乱の可能性もある。

第65号土坑 (SK-65、第41図)

位置 調査区南側、第21号溝と第129号、131号竪穴建物との間に位置する。

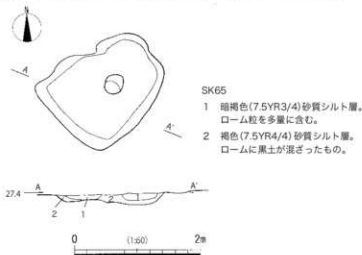
規模と平面形 1.5×2m程度を呈する不整な方形を呈する。中央に直径30cm、土坑底面からの深さ10cm程度のピットが認められた。

断面形 確認面からの深さ10～20cm程度を測る。皿状の断面形を呈し、緩やかに立ち上がる。

覆土 ローム粒を多く含んでいることから、埋め戻したものか。

遺物 土師器を中心とした遺物が若干出土しているが、図示できるものはなかった。

所見 出土遺物から古墳時代の土坑と考えられるが、用途は不明である。



第41図 第65号土坑

第66号土坑 (SK-66、第42図)

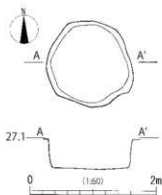
位置 調査区北側、第17号溝の北に位置する。

規模と平面形 直径1.3m程度の円形を呈する。

断面形 確認面からの深さは45cm程度、床面は平坦で壁は急角度で立ち上がり、方形を呈する。

遺物 摩滅した縄文土器片が1点出土しているが、図示できるものはなかった。

所見 時期、用途ともに不明である。



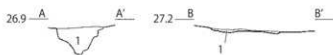
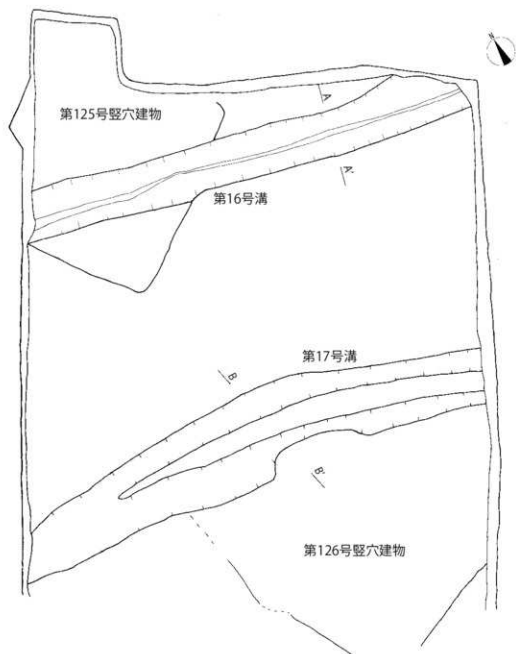
第42図 第66号土坑

第16号溝 (SD16、第43図)

位置 調査区北側を東西に横断するように位置する。第125号竪穴建物を切る。

規模と平面形 幅2～2.5m程度、東西方向に直線的に延びる。

断面形 幅10cm程度の底面まで階段状に狭くなる。確認面からの深さは最大で約55cmを測る。



SD16(A-A)

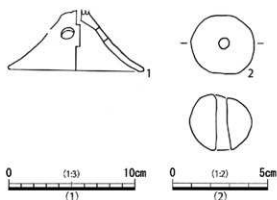
- 1 褐色(7.5YR4/4)砂質シルト層。ローム粒、ロームブロックをわずかに含む、しまり弱い。

SD17(B-B)

- 1 暗褐色(7.5YR3/4)砂まじりシルト層。ローム粒を僅かに含む。



第43図 第16, 17号溝



第44図 第16号溝出土遺物

第23表 第16号溝出土遺物観察表

発掘 番号	種類 器種	法量	胎土	色調	焼成	器形の特徴	技法の特徴
1	土師器 器台	B (20.9) C (5.0)	長石・石英中量、 霞母微量	赤褐色	普通	器台の裾部、わずかに外反しながら大きく開く。裾に三か所、受けに一か所の穿孔。	内面はハケメ後ナデ。外面縦ミガキ。
2	土製品 土玉	A3.1 B3.3 C2.85 重量 27.3g	微細な長石・石 英、霞母少量	にぶい褐色	普通	孔径は約6～8mmで、いびつな球形を呈する。	ナデ。二次焼成による剥落。

覆土 しまりが弱い均一な堆積物で充填されており、埋め戻されたと考えられる。

遺物 (第44図、第23表) 土師器を中心とした遺物が出土しているが、第125号堅穴建物を切っているため、同建物跡に帰属するものであろう。

所見 規模と形態から、近現代の根切り溝と考えられる。

第17号溝 (SD17、第43図)

位置 調査区北側、第66号土坑と第126号堅穴建物の間に位置する。第126号堅穴建物を切っている。

規模と平面形 幅3～4.5m程度、緩やかな弧を描いて東西方向に延びる。

断面形 溝の縁辺が低く、中央が高い。確認面からの深さは5cm程度である。

覆土 表土と同様の堆積物によりわずかに被覆されていた。溝の低い部分の底面は光沢をもち、極めて硬く締まった硬化面であった。

遺物 土師器破片がわずかに出土したが、図示できるものはなかった。

所見 形態と硬化面から、大八車や自動車の轍と考えられる。出土した土師器片は流れ込みであろう。

第18号溝 (SD18、第45、46図)

位置 調査区北側、第126号堅穴建物を切って調査区を東西に横断する。第19号溝に切られる。

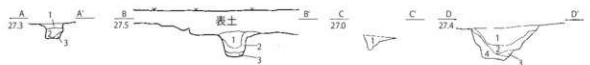
規模と平面形 幅40～60cm程度、直線的に東西に延びる。

断面形 平坦な底面をもち、壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面からの深さは30cm程度である。

覆土 ロームブロックが多く含まれており、埋め戻されたものか。



第45図 第18～21号溝,ピット群



- SD18 1 ロームブロック・ローム粒を多量に含む暗褐色砂質シルト層。
 2 黒褐色(7.5YR3/2)砂質シルト層。ローム粒子、ロームブロックを含み、炭化物をわずかに含む。
 3 暗褐色(7.5YR3/3)砂まじりシルト層。ロームブロックを多く含む。ロームに黒色土が混ざったもの。
- SD19 表土 黒褐色(7.5YR2/2)砂質シルトからなる土層。植物の根が密集。
 1 黒褐色(7.5YR3/2)砂質シルト層。ローム粒、炭化物をわずかに含む。
 2 暗褐色(7.5YR3/3)砂質シルト層。ローム粒を多量に。炭化物をわずかに含む。上下の層と比べてとても締りが弱くボンボソしている。
 3 極暗褐色(7.5YR2/3)砂質シルト層。ローム粒をわずかに含む。SD19覆土の中で最も湿り強い。
- SD20 1 極暗褐色(7.5YR2/3)砂質シルト層。ローム粒を多量に。ロームブロックを僅かに含む。
- SD21 1 暗褐色(7.5YR3/4)砂質シルト層。ローム粒を中量含む。
 2 暗褐色(7.5YR3/4)砂質シルト層。1mほどのロームブロック、ローム粒を中量含む。1よりもロームが多い。
 3 暗褐色(7.5YR3/4)砂まじりシルト層。ローム粒を多量に含む。2と異なり、ロームブロックを含まず、湿り方がより強い。
 4 暗褐色(10YR3/4)砂まじり粘土質シルト層。二次的に堆積したロームを主体とし、黒土が混ざったもの。

第46図 第18～21号溝セクション

遺物 土師器破片がわずかに出土したが、図示できるものはなかった。

所見 時期、用途ともに不明である。

第19号溝 (SD19、第45、46図)

位置 調査区中央の西側、第18号、20号溝を切って構築されている。

規模と平面形 確認されたのは幅60cm、長さ1m程度であり、調査区外に延びている。

断面形 底面は平坦で、壁は急角度で立ち上がる。確認面からの深さ60cmを測る。

覆土 下に凸のレンズ状の堆積構造を示しており、自然に埋没したものか。

遺物 土師器破片がわずかに出土したが、図示できるものはなかった。

所見 時期、用途ともに不明である。

第20号溝 (SD20、第45、46図)

位置 調査区中央、第127号竪穴建物の西に位置する。第19号溝、21号溝に切られる。また、後世の柱穴と思われるP1が掘りこまれている。

規模と平面形 幅50cm～1m程度、南北に直線的に延びる。

断面形 底面は幅10cm程度、西壁が急角度で、東壁は緩やかに立ち上がる。確認面からの深さは30cm程度である。

覆土 ローム粒を多量に含む均一な堆積物で充填されており、埋め戻されたものか。

遺物 図示できるものはなかったが、古墳時代前期の土師器破片が比較的多く出土した。

所見 用途は不明であるが、柱穴をと思われる遺構が掘りこまれていること、比較的多くの遺物が出土していることから、古墳時代前期の溝の可能性はある。

第21号溝 (SD21、第45、46図)

位置 調査区中央、第20号溝、第127号竪穴建物の南側を切って構築されている。

規模と平面形 幅1.5～1.9m程度、北西-南東方向に直線的に延びる。

断面形 底面は幅50cm程度、壁は急角度で立ち上がるが、南壁の立ち上がり方がやや緩やかである。

覆土 南北両側の壁からの崩積（4層、3層）と、凹地を充填した堆積物によって埋積されており、構造から自然堆積と考えられる。

遺物 土師器の小破片がわずかに出土したが、図示できるものはなかった。

所見 時期は切り合い関係から古墳時代前期以降、用途は不明である。常名台遺跡群確認調査（常名台遺跡調査会編2002）では古墳の周溝の可能性が指摘されていたが、周囲の状況からその可能性は低いだろう。

ピット群（第45図）

位置 調査区中央、第20号溝と第127号竪穴建物を掘りこんで構築されている。

規模と形態 3基のピットはいずれも直径30～40cm程度、底径15～20cm程度で明瞭な硬化面が認められる。

遺物 遺物の出土はなかった。

所見 切り合い関係と形態から、古墳時代前期以降の柱穴と考えられるが、どのような建物の柱穴であるかは不明である。

第6章 自然科学分析

第1節 出土木材の樹種同定

試料と方法 北西原遺跡（第8次調査）で出土した炭化材20点について、樹種同定を株式会社パレオ・ラボに委託して実施した。試料は、第126号竪穴建物から出土した炭化材6点と、第127号竪穴建物から出土した炭化材13点と屋根材と思われる草本1点である（第24表）。

樹種同定に先立ち、肉眼観察と実体顕微鏡観察による形状の確認と、残存年輪数および残存径の計測を行った。その後、カミソリまたは手で3断面（横断面・接線断面・放射断面）を割り出し、直径1cmの試料台に試料を両面テープで固定した。次に、イオンスパッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製 VHX-D510）を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

結果 樹種同定の結果、炭化材は広葉樹のコナラ属コナラ節（以下、コナラ節）が確認された。屋根材と思われる草本はイネ科であった。結果を第24表に示す。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

(1) コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 PL26 1a-1c（分析No.5）、2a-2c（分析No.7）

大型の道管が年輪のはじめに1列程度並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織の2種類がある。

コナラ節は暖帯から温帯下部に分布する落葉高木で、カシワとミズナラ、コナラ、ナラガシワがある。材は全体的に重硬で、加工困難である。

(2) イネ科 Poaceae PL26 3a（分析No.20）

柔細胞と維管束で構成される単子葉類である。維管束が柔細胞中に散在する不斉中心柱で、維管束を囲む維管束鞘は薄い。稈の組織のみから属や種を識別するのは難しい。

考察 第126号および第127号竪穴建物から出土した炭化材は、いずれもコナラ節であった。関東地方北部では、弥生時代～古墳時代の住居跡出土の建築部材や炭化材は、クスギ節やコナラ節が多い傾向がある（伊東・山田編2012）。茨城県では同時期の分析事例は少ないが、本遺跡の至近に所在し、常名台遺跡群を構成する神明遺跡の第5次調査において、古墳時代前期の焼失住居（第12号住居跡）出土炭化材の樹種同定が行われている（植田2005）。分析した26点中、25点がコナラ節、1点がアカガシ亜属であり、古墳時代前期の常名台遺跡群では、建築部材としてコナラを中心に利用していたことがわかる。

第2節 炭化モモ核の保存処理

北西原遺跡（第8次調査）で出土した炭化モモ核について、保存処理を株式会社パレオ・ラボに委託して実施した。資料は、第128号、第129号、第46号竪穴建物から出土した炭化モモ核、計7点である（第25表参照）。まず資料に付着した土壌をアセトンを用いて取り除き、自然乾燥させた後、計

測と撮影を行った。次に資料をバラロイドB72の9%アセトン溶液に含浸させた後、取り上げて自然乾燥させた。その後、破片に分かれていた試料については、バラロイドB72の40%アセトン溶液を用いて接合を行った。なお、バラロイドB72はアクリル合成樹脂で、優れた接着性能と凝集性能を持つ。保存処理を施した後、再度計測と撮影を行った。

保存処理の結果、処理後に形状に大きな変化は見られなかった。また、第128号堅穴建物出土のNo.2（分析No.1）については、接合不能な破片が含まれており、2個体分あったとみられる。

引用文献

伊東隆夫・山田昌久編2012『木の考古学－出土木製品用材データベース－』海青社

植田弥生2005『神明遺跡焼失住居（12号住居跡）出土炭化材の樹種同定』『神明遺跡（第5次調査）』土浦市教育委員会 90-93頁

平井信二1996『木の百科』朝倉書店

第24表 樹種同定結果

分析No.	遺構	No	樹種	分析No.	遺構	No	樹種
1	SI126	6	コナラ属コナラ節	11	SI127	16	コナラ属コナラ節
2	SI126	7	コナラ属コナラ節	12	SI127	17	コナラ属コナラ節
3	SI126	8	コナラ属コナラ節	13	SI127	18	コナラ属コナラ節
4	SI126	9	コナラ属コナラ節	14	SI127	19	コナラ属コナラ節
5	SI126	10	コナラ属コナラ節	15	SI127	20	コナラ属コナラ節
6	SI126	11	コナラ属コナラ節	16	SI127	21	コナラ属コナラ節
7	SI127	12	コナラ属コナラ節	17	SI127	22	コナラ属コナラ節
8	SI127	13	コナラ属コナラ節	18	SI127	23	コナラ属コナラ節
9	SI127	14	コナラ属コナラ節	19	SI127	24	コナラ属コナラ節
10	SI127	15	コナラ属コナラ節	20	SI127	一括	イネ科草本

第25表 炭化モモ核保存処理資料（単位:mm、括弧内は破片値を表す）

分析No.	遺構	No.	分類群	部位	形状	法量（処理前）			法量（処理後）			備考
						長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	
1	SI128	2	モモ	核	破片	(17.84)	16.10	(12.53)	(18.92)	16.68	(12.73)	2個体分含まれる
2	SI128	3	モモ	核	破片	(10.18)	(9.29)	(4.10)	(10.74)	(9.28)	(4.52)	
3	SI129	46	モモ	核	破片	(16.69)	(14.27)	(6.17)	(16.90)	(13.99)	(6.28)	
4	SI46	7	モモ	核	破片	17.52	15.02	14.38	17.35	14.88	14.18	
5	SI46	8	モモ	核	破片	19.76	(15.25)	14.27	19.74	17.17	14.22	
6	SI46	9	モモ	核	完形	18.69	15.27	13.11	20.10	15.14	13.14	
7	SI46	10	モモ	核	完形	20.56	15.44	13.60	18.34	15.06	12.83	

第7章 総括

第1節 浅間台一字一石経塚

経石、特に多字一石の解説から、本経塚に埋納されたのは妙法蓮華経（法華経）であり、両親（両新）の菩提を弔うことを目的にこの一字一石経塚が造立されたことが判明した。

経石以外の出土遺物のうち、美濃窯製品の灰軸折縁輪禿鉢は18世紀中葉の産である。また新寛永通宝の铸造年代は、1697年から1747年までと、1767年から1781年までの2時期にわたっている。これらを踏まえると、当経塚の造営年代は18世紀中葉から後半代と考えるのが妥当と考えられる。

昭和50（1975）年刊行『土浦市史』第3章「江戸時代後期第3節後期の文化」に、市内発見の一字一石経の事例として永国字和台と木田余西の2箇所が記述されている（同書632頁）。残念ながらこれ以上の詳細な記述を欠き、内容が不詳であったため両者共に埋蔵文化財の保護対象からは外れていた。市史刊行後に発見された手野町正東院墓地の一字一石経塚は、遺存状態が良く正徳5年（1715）の石碑も伴うため、平成元年（1989）に市史跡の文化財指定を受けている。今回の調査では約40年ぶりに木田余地内の経塚を再発見することができた。

調査と整理作業の結果、法華経が埋経され、多字一石の分析から造立者について一定程度は明らかにすることができた。残念ながら出土遺物が大量であったため、報告書に掲載できた情報量は非常に限られたものとなってしまった。今後も、この経塚が営まれた近世当時の社会的かつ宗教的な背景を踏まえた分析を続けて行きたい。

第2節 宮西A遺跡

今回の発掘では、宮西A遺跡の南東部分を調査した。宮西A遺跡の立地する台地上には宮西B遺跡、宮西C遺跡が広がるが、これまで調査されたのは宮西C遺跡のごく一部に過ぎず、実態はよくわかっていなかった。

検出された遺構は竪穴建物と掘立柱建物の柱穴である。調査区が狭小のため、いずれの建物も一部分のみの発掘であるが、内面黒色処理の土師器といった出土遺物から、第1～3、第5号竪穴建物は10世紀代に位置付けられる。倒立した須恵器をカマドの袖に利用した第4号竪穴建物は、外面に同心円状の叩き目をもつ8世紀代の須恵器も出土したが、カマドに用いられた須恵器から考えると9世紀代に位置づけられる。柱穴は、その配置から掘立柱建物を復元することはできず、遺物の出土も見られなかった。しかし、近隣に所在する平安時代の大集落である入ノ上遺跡では、類似した規模の柱穴からなる平安時代の掘立柱建物が多数検出されていることから、宮西A遺跡の柱穴も平安時代の掘立柱建物と考えることができよう。

今回の調査によって、宮西A遺跡の南東部分に平安時代の集落が展開していたことが明らかとなった。この集落は市道を挟んで南に隣接する宮西C遺跡にも展開していると考えられる。霞ヶ浦を望む田村町、神宿町からかすみがうら市戸崎・加茂にかけての一带は、古代常陸国の茨城郡大津郷にあたる。入ノ上遺跡や田村・神宿遺跡群のような、墨書土器や金属器といった多彩な出土遺物は見られないことから、宮西A遺跡は古代大津郷を支える一般民衆の村であったと考えられよう。

第3節 北西原遺跡（第8次）

北西原遺跡を含む常名台遺跡群では、これまでの調査によって、北西原遺跡を中心とする台地西側に100軒を超える古墳時代前期の竪穴建物群が検出されている。今回の第8次調査でも、検出された8軒の竪穴建物はすべて古墳時代前期のものである。本次調査の成果は、おおむねこれまでの調査成果を追認するものであったけれども、いくつかの特筆すべき点について以下にまとめた。

1. 第127号竪穴建物について

今次調査において唯一、建物跡全体を調査することができた第127号竪穴建物は、多量の炭化材の出土によりいわゆる焼失住居が想起される。しかし、炭化材や焼土塊は建物中央では床面直上で出土するものの、建物の壁に近づくほど床面から浮いて出土していた。また、炭化材、焼土の上には、人為的に埋め戻した堆積物が認められた。これらのことから、本跡は焼失住居というよりは、建物がある程度埋まってから、建材の燃焼行為が行われたと解釈した。常名台遺跡群では、北西原遺跡（第3次）100号住居跡や、神明遺跡（第5次）第12号住居跡など、焼失住居とされる竪穴建物が複数検出されている。これらの中には、文字通り使用時に焼失した住居も含まれるであろうが、神明遺跡（第5次）第12号住居跡では壁際や周溝の堆積後に焼土、炭化材が形成されていることから、廃棄後の火災が想定されている。本跡も同様であり、火災または、竪穴建物廃棄後の意図的な火入れ行為が想起される。なお本跡では、入口付近の床面が畝状に盛り上がるほか、ベッド状遺構とするほど顕著ではないが、炬を囲むように壁際の床面が一段高く作られていた。こうした床面の段差は市内では尻替遺跡などに類例がある。

2. 第129号竪穴建物について

本跡では、図化したものだけで19個体もの高坏、器台が出土している。これだけの供献具がひとつの遺構から出土した背景には、祭祀的な行動を想定せざるを得ない。これらの高坏、器台の多くは床面直上ではなく、浮いた状態で出土していることから、第127号竪穴建物の炭化材同様、竪穴建物がある程度埋没してから祭祀が行われたと考えられる。

3. 大廓式土器について

第131号竪穴建物から出土した第38図2の土器は、極めて厚手で棒状浮文が施される。静岡県東部に分布する大廓式土器であり、市内では向原遺跡第64号住居址（第113図2の土器で、天地逆に実測され埴輪として報告されている）、大宮前遺跡第2号住居跡に出土例がある。常名台遺跡群では、これまでの発掘調査で近畿、東海、南関東などの外来系土器が出土している。大廓式も未報告資料の中には数点認められるものの、常名台遺跡群のなかで図示されたのは初めてである。胎土は浅黄色を呈し赤褐色の礫を含み、他の土器と異なることから搬入品と考えられる。外来系の土器の多くが在地の胎土で製作されている一方、モノの移動の明確な証拠である本資料は重要であろう。

最後になりましたが、平成27・29年度市内遺跡発掘調査にご協力いただいた関係各位に心より感謝申し上げます。

写真図版



経塚発見時の状況
(写真中央の木根間から発見)



経石出土状況



経石出土状況 (拡大)

PL2

浅間台一字一石経塚



経石埋納土坑完掘状況（東から）



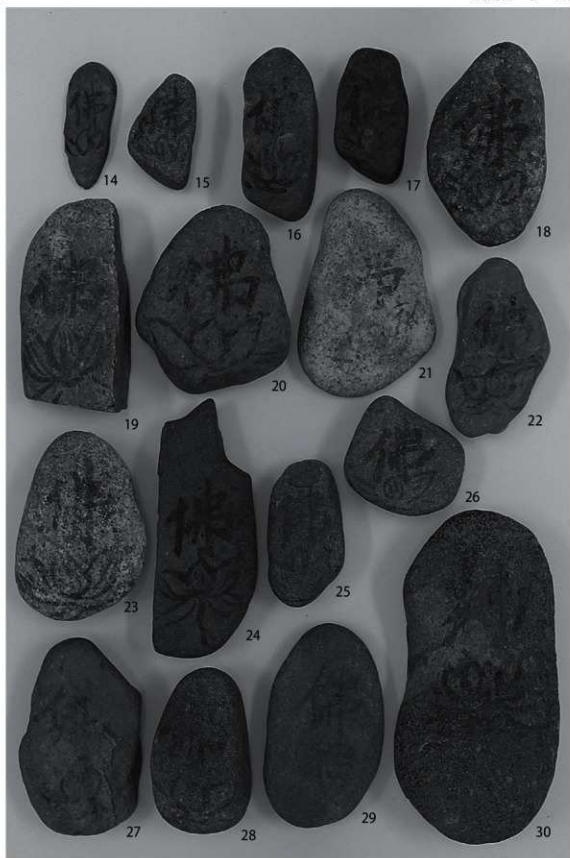
経石埋納土坑完掘状況（上から）



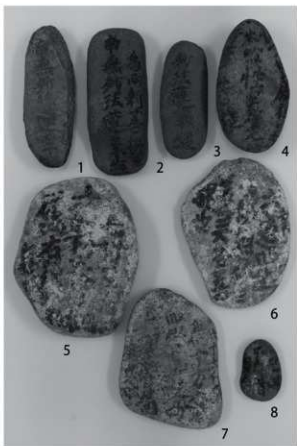
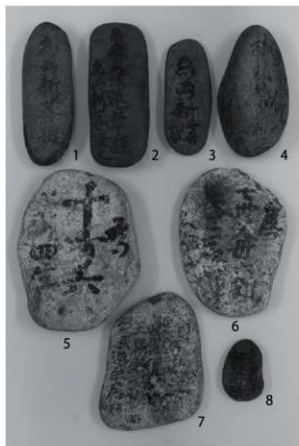
経塚完掘状況（斜面奥部の土坑）



蓮華座をもつ佛字碟 (1)



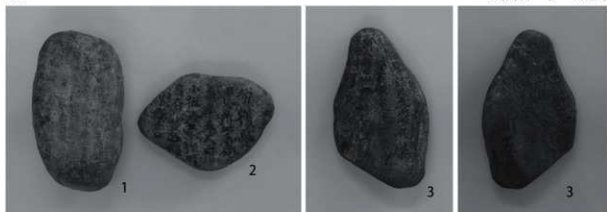
蓮華座をもつ佛字磔 (2)



多字一石 A種（埋経の趣旨・埋経者の法名・偈頌等，経塚造立に関する内容を記したもの）(1)



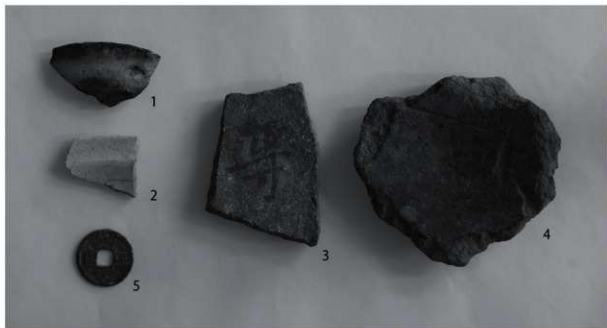
多字一石 A種（埋経の趣旨・埋経者の法名・偈頌等，経塚造立に関する内容を記したもの）(2)



多字一石 B種（法華経内の一節を記したもの）（1）
 [左：信解品第四の一節を記した経石，右（2面）：分別功德品第十七の一節を記した経石]



多字一石 B種（法華経内の一節を記したもの）（2）
 [左：提婆達多品第十二の一節を記した経石，右：如来寿量品第十六の一節を記した経石]



経石以外の出土遺物



宮西 A 遺跡 1 区全景



宮西 A 遺跡 2 区全景



第 1 号竖穴建物



第 1 号竖穴建物
遺物 (1) 出土状況



第 2 号竖穴建物



第 3 号竪穴建物



第 4 号竪穴建物



第 4 号竪穴建物
カマドセクション



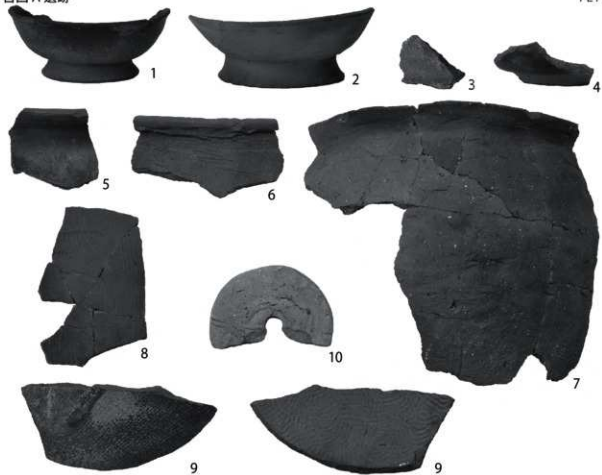
第 5 号竪穴建物



第 1 号柱穴



第 2 ~ 9 号柱穴



第 1 号竖穴建物出土遺物



第 2 号竖穴建物出土遺物



第 3 号竖穴建物出土遺物



第 5 号竖穴建物出土遺物

PL12

宮西 A 遺跡



第 4 号竖穴建物出土遺物



北西原遺跡 (第8次) 全景



第125号竖穴建物

PL14

北西原遺跡 (第8次)



第126号竖穴建物



第126号竖穴建物
遺物 (1) 出土状況



第127号竖穴建物



第127号竪穴建物
炭化材出土状況



第127号竪穴建物
南北ベルトセクション
(西から)



第128号竪穴建物



第 129, 130 号竪穴建物



第 129, 130 号竪穴建物
セクション



第 129 号竪建物
遺物 (22,23) 出土状況



第129号竖建物
遺物(27)出土状況



第131号竖穴建物



第46号竖穴建物



第46号竪穴建物セクション



第1号不明遺構



第65号土坑



第 66 号土坑



第 16 号溝



第 17 号溝

PL20

北西原遺跡 (第8次)



第 18,19 号溝



第 20 号溝



第 21 号溝



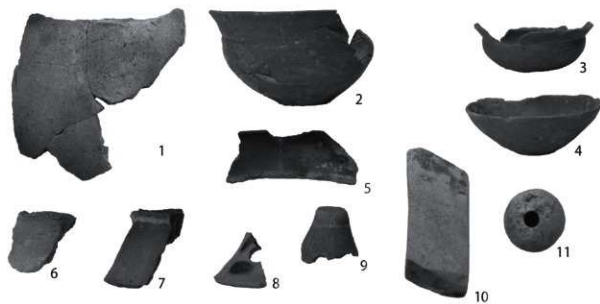
ピット群 (P1)



第 125 号竖穴建物出土遺物



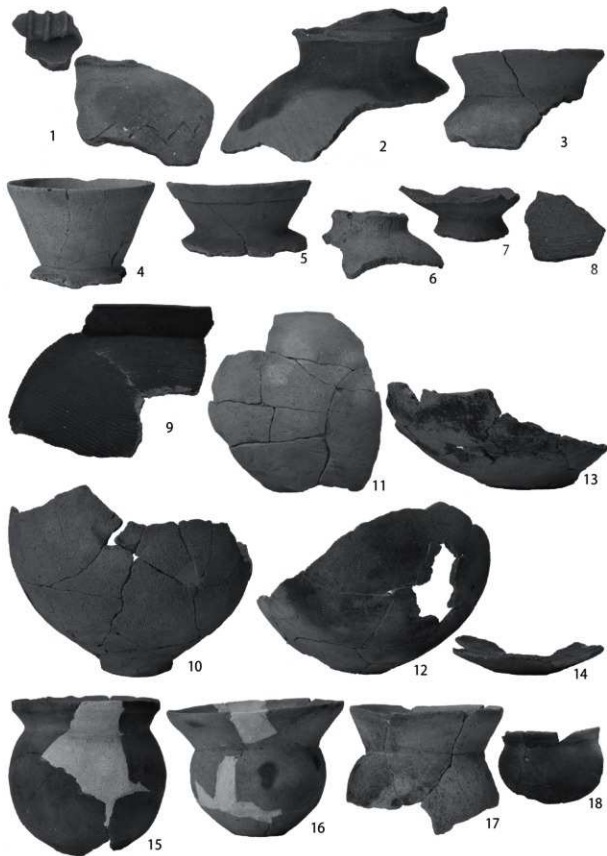
第 126 号竖穴建物出土遺物



第 127 号竖穴建物出土遺物



第 128 号竖穴建物出土遺物



第129号竖穴建物出土遺物(1)





第129号竖穴建物出土遺物 (3)



第131号竖穴建物出土遺物



第46号竖穴建物出土遺物

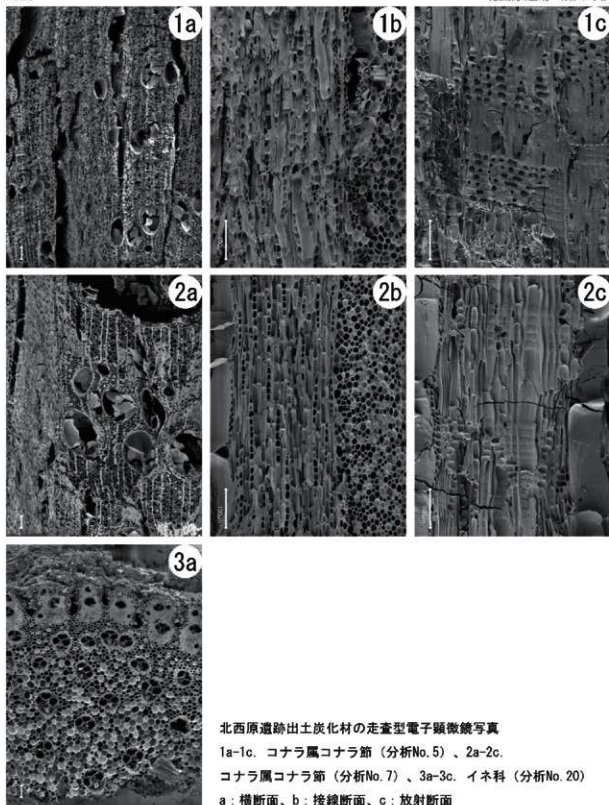


第1号不明遺構出土遺物

第16号溝出土遺物



出土炭化モモ核



北西原遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. コナラ属コナラ節 (分析No. 5)、2a-2c.

コナラ属コナラ節 (分析No. 7)、3a-3c. イネ科 (分析No. 20)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

抄 録

ふりがな	せんげんだいいいちじいつせききょうづか・みやにしえーいせき・きたにしはらいせき							
書名	浅間台一字一石経塚・宮西 A 遺跡・北西原遺跡 (第 8 次)							
副書名	平成 27・29 年度市内遺跡発掘調査報告書							
編集者名	亀井 翼	著者名	比毛君男・亀井 翼・小屋亮太・荒井美香					
編集機関	上高津貝塚ふるさと歴史の広場							
所在地	〒300-0811 茨城県土浦市上高津 1843 TEL 029-826-7111							
発行機関	土浦市教育委員会							
所在地	〒300-0036 茨城県土浦市大和町 9 番 2 号 TEL 029-826-1111 (代表)							
発行年月日	西暦 2020 年 (令和 2 年) 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡 番号					
浅間台一字 一石経塚	土浦市 木田余 字 浅間台2548	203	478	36° 5' 49.9"	140° 12' 54.9"	2015年6月2日 ～6日	3㎡	急傾斜地対 策工事
宮西A遺跡	土浦市 沖宿町 字 宮西2329 外	203	385	36° 4' 33.4"	140° 15' 7.8"	2016年1月25日 ～2月3日	88㎡	市道改良工 事
北西原遺跡 (第 8 次)	土浦市 常名 2821 外	203	238	36° 6' 24.3"	140° 10' 58.7"	2018年1月20日 ～3月20日	360㎡	都市計画道 路建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
浅間台一字 一石経塚	経塚	近世		経塚 1 基		経石 美濃産陶器 銅銭(寛永通宝)	経文は法華経。 18世紀中葉～後半と 推定。	
宮西 A 遺跡	集落跡	平安時代		堅穴建物 5 軒 柱穴 9 基		土師器 須恵器 土製品(土玉・ 紡錘車)	9～10 世紀の集落 跡。両袖に倒立した 須恵器を用いたカ マドを検出。	
北西原遺跡	集落跡	古墳時代 (前期)		堅穴建物 8 軒 土坑 2 基 不明遺構 1 基 溝 6 条		土師器 土師器(大塚式) 土製品(土玉) 砥石 炭化材 炭化モモ核	古墳時代前期の集 落跡。堅穴建物があ る程度埋没してから、 建材の燃焼や高 坏・器台の多量廃棄 が行われた。	

浅間台一字一石経塚・宮西A遺跡・北西原遺跡（第8次）

—平成27・29年度市内遺跡発掘調査報告書—

発行日 令和2年3月31日

編集 上高津貝塚ふるさと歴史の広場

〒300-0811 茨城県土浦市上高津1843

TEL 029-826-7111

発行 土浦市教育委員会

〒300-0036 茨城県土浦市大和町9番2号

TEL 029-826-1111（代表）

印刷 菊池印刷株式会社
